

平成22年度

岡山大学 岡山県教育委員会  
教育学部・大学院教育学研究科 岡山市教育委員会

# 連携協力事業研究報告書

岡山大学 教育学部  
大学院教育学研究科

## もくじ

### 巻頭言

(加賀研究科長)

I	岡山大学教育学部・大学院教育学研究科と岡山県・岡山市教育委員会との連携協力	
1	岡山県教育委員会との連携協力	
	(1) 目的	5
	(2) 発足から平成21年度までのあしあと	6
2	岡山市教育委員会との連携協力	
	(1) 目的	10
	(2) 発足から平成21年度までのあしあと	10
3	平成22年度の連携協力会議委員・専門部会委員一覧表	
	(1) 岡山県教育委員会	12
	(2) 岡山市教育委員会	13
	(3) 岡山大学教育学部・大学院教育学研究科	14
4	平成22年度の活動	
	(1) 岡山市教育委員会との専門部会	15
	(2) 岡山県教育委員会との専門部会	16
	(3) 3者の合同連携協力会議	18
II	平成22年度の岡山県との連携協力事業	
1	平成21年度からの継続事業	
	(1) 教員養成に関する事項	
	①総合教育センターにおける研修講座及び発表会の学生・大学教員への公開	23
	②現職教員等による教員養成への協力	25
	③「教師への道」インターンシップ事業	27
	④学生による学力向上支援への協力	29
	(2) 教員研修に関する事項	
	①新学習指導要領家庭科授業への提案-中国地区5県の家庭科実践研究を中心として-	31
	②中・高等学校美術科の授業づくり	33
	(3) 学校教育上の諸課題への対応に関する事項	
	①「子どもほっとライン事業(子ども電話相談)」への多面的な連携協力	35
	②生きる力応援プラン「夢さがしの旅」推進事業	37
	③教職員のメンタルヘルス対策	40
	④大学、大学院での教員養成カリキュラムの改善	41
	⑤高等学校における発達障害支援推進事業	43
	(4) その他、両者が必要と認める事項	
	①附属学校園を活用した研修講座の開催	45
	②県生涯学習大学(のびのびキャンパス岡山)「大学院コース」講座の開設	47
2	平成22年度の連携重点事業	
	(1) 「教師への道」インターンシップ事業	49

Ⅲ	平成22年度の岡山市との連携協力事業	
	(1) 教員養成に関する事項	
	①岡山市の教育施設における学校支援ボランティア事業	53
	②大学企画講座における岡山市立学校長等の講演	54
	③大学と学校園現場との連携に関わる調査研究	62
	(2) 教員研修に関する事項	
	①学力・授業力アップ支援事業	66
	②授業で変わる！いきいき岡山っ子育成事業	68
	③教職員への指導・助言	70
	(3) 学校教育上の諸課題への対応に関する事項	
	①その他のボランティア制度	71
Ⅳ	その他事業における岡山県・岡山市等との連携	
	1 理数系教員（C S T）養成拠点構築事業について	75
	2 岡山大学教員と岡山県・岡山市教育委員会等との連携の取組（参考資料）	77
Ⅴ	連携協力の成果・課題・展望	
	1 連携協力の成果・課題・今後の展望	83

あとがき

## 【巻頭言】

教育の充実・発展への寄与を期して

岡山大学大学院教育学研究科長  
加 賀 勝

平成 22 年度連携協力事業研究報告書を刊行するにあたり、ご尽力いただきました皆様に心から感謝いたします。

平成 12 年に岡山県教育委員会と岡山大学教育学部は、教員の資質・能力の向上および教育上の諸課題に対応し、岡山県下の教育の充実・発展を図るため「連携協力に関する覚書」を交わしました。岡山県教育委員会との連携協力体制が確立され、着実な成果をあげておりますことに感謝いたしております。

また、平成 21 年の政令市移行にともなって岡山市教育委員会と岡山大学教育学部・大学院教育学研究科は、教育の充実・発展に寄与することを目的として「連携協力に関する協定書」を締結しました。具体的内容としては、岡山県教育委員会との連携内容である「教員養成に関する事項」「教員研修に関する事項」「学校教育上の諸課題への対応に関する事項」「その他、両者が必要と認める事項」の 4 つの事項に、「教育研究の協力に関する事項」が加わったものであります。これまでも教員養成及び教員の資質・能力の向上等に向けて連携・協力をいただいてまいりましたが、協定書の締結を機に相互連携体制のさらなる強化をお願いしたいと考えております。

これまで、岡山県・岡山市教育委員会との連携を中心的に担っておりました教育学部附属教育実践総合センターは、平成 21 年度文部科学省大学教育推進 GP「総合大学が担う特色ある教員養成の質保証」の採択を契機に発展的に改組され、平成 22 年 4 月に「教師教育開発センター」を全学組織として設置いたしました。「教師教育開発センター」は、教師教育開発部門、教職支援部門、教職コラボレーション部門、理数系教員養成事業部門の 4 部門で構成しています。教師教育開発部門は、教職コア・カリキュラムの開発と研究、教育実習の企画・運営・研究、教育学部附属学校園との連携協力事業等を果たす部門です。教職支援部門は「教職相談室」を開設し、教職支援・教職相談の企画・運営を担います。教職コラボレーション部門は、岡山県・岡山市教育委員会等との連携協力事業を実施するとともに、学生のボランティア活動やインターンシップ事業の計画・実施、現職教員研修の企画・運営等を担います。理数系教員養成事業部門は、(独)JST が実施する「理数系教員養成拠点構築事業」の採択を受け、大学と教育委員会が連携して地域の理数教育において中核的な役割を担う教員の養成を担う部門として、平成 22 年 8 月に新たに設置されました。

「教師教育開発センター」の開設以前から、岡山県・岡山市教育委員会には多方面にわたりご支援いただいております。今後とも、岡山大学教育学部および教育学研究科、岡山県教育委員会、岡山市教育委員会の三機関が、教員の養成や研修、学校教育上の諸課題等についてそれぞれの役割を認識し、相互連携体制の強化と事業の一層の活性化・実質化を通して、岡山県下の教育の充実・発展に寄与できることを期したいと考えております。



I

岡山大学教育学部・大学院教育学研究科と岡山県・岡山市教育委員会との連携協力

1 岡山県教育委員会との連携協力

- (1) 目的
- (2) 発足から平成21年度までのあしあと

2 岡山市教育委員会との連携協力

- (1) 目的
- (2) 発足から平成21年度までのあしあと

3 平成22年度の連携協力会議委員・専門部会委員一覧表

- (1) 岡山県教育委員会
- (2) 岡山市教育委員会
- (3) 岡山大学教育学部・大学院教育学研究科

4 平成22年度の活動

- (1) 岡山市教育委員会との専門部会
- (2) 岡山県教育委員会との専門部会
- (3) 3者の合同連携協力会議



# I 岡山大学教育学部・大学院教育学研究科と岡山県・岡山市教育委員会との連携協力

## 1 岡山県教育委員会との連携協力

### (1) 目的

岡山大学教育学部と岡山県教育委員会とは、平成12年9月1日に「連携協力に関する覚書」を交換し、正式に「連携協力事業研究」として進めることになった。

連携協力の目的は、「連携協力に関する覚書」の第1条に、次のように示されている。

「連携協力に関する覚書」

(目的)

第1条 岡山大学教育学部（以下「甲」という。）と岡山県教育委員会（以下「乙」という。）とは、教員の資質・能力の向上及び教育上の諸課題への対応のため、相互に連携して基礎的・実践的研究を行い、その成果を生かして岡山県の教育の充実・発展を図る。

第1の目標は、「教員の資質・能力の向上」を図ることである。

社会の変化の著しい中において学校現場の課題は、複雑化・多様化してきている。教員には、こうした課題に臨機に適切に対応できる高度な専門性と高度な実践的指導力が求められるようになった。従前は、養成段階は大学が受け持ち、採用段階・研修段階は教育委員会が受け持つというのが一般的であった。しかし、今日の学校現場の課題を勘案すれば、教育職員養成審議会第1次答申（1997）に示されたように、「養成段階」「採用段階」「研修段階」の各段階において、岡山大学教育学部と岡山県教育委員会とが連携して教員の資質・能力の向上にむけて取り組むことが大切である。教員養成に関しては、本学部にて「教職大学院」を新設し、平成20年度4月の開講の運びとなった。高度な専門性と高度な実践的指導力を兼ね備えた教員養成を目的としている。岡山大学教育学部と岡山県教育委員会との連携協力の一層の充実・発展が期待されることとなった。

第2の目標は、「教育上の諸課題への対応」である。

学力低下問題への対応、いじめ、不登校への対応、教員の指導力の向上、情報化に対応した教育の充実等、学校現場が抱えている急務な教育上の諸課題への対応である。複雑化、多様化する傾向にあるこうした学校現場の教育上の諸課題に如何に対応すべきか、なかなか難しい状況にある。特に、学力に関しては、平成19年度4月実施の全国学力調査結果によれば、岡山県の義務教育段階の学力は、全国平均を下回るものであった。こうした教育上の諸課題に適切に対応するには、両者の持つ知的資源・人的資源を連携協力して有効活用することが大切である。

第3の目標は、「岡山県の教育の充実・発展を図ること」である。

岡山県の教育の充実・発展を図ることは、中期的・長期的な目標であり、簡単に実現できる話ではない。目標達成に向け、「教員養成に関わる事業」「教員研修に関わる事業」「学校諸課題に対応する事業」「その他両者が必要とする事業」の4つのカテゴリーからなる具体的な事業を相互に連携して基礎的・実践的研究を行い、その成果を生かして岡山県の教育の充実・発展を図ることが大切である。



## (2) 発足から平成21年度までのあしあと

### 平成12年度（発足）

- ①4月19日、「連携協力ワーキンググループ」の設置。
- ②8月10日、第1回「連携協力会議」の開催。
- ③9月1日、第2回「連携協力会議」の開催。
  - ・「連携協力に関する覚書」の締結。
- ④上記の締結の後、「教員養成に関する事項」「教員研修に関する事項」「学校教育上の諸課題への対応に関する事項」「その他両者が必要と認める事項」の4項目のカテゴリーに関する11件の事業が実施された。
- ⑤平成12年度の連携協力事業研究については、平成13年5月20日に「連携協力事業研究報告書」にまとめた。

### 平成13年度

- ①6月19日、岡山大学教育学部と岡山県教育委員会との合同「連携協力会議専門部会」の開催、平成13年度の連携事業の検討。
- ②7月19日、平成13年度「連携協力会議」の開催。
  - ・「教職希望学生の学校教員インターンシップ」「教員のメンタルヘルス」等、9件の連携協力事業が新規に承認され、あわせて15件の連携協力事業として実施されることになった。
- ③平成14年3月28日、「連携協力会議専門部会」の開催。
  - ・平成14年度の連携協力事業の検討。
- ④平成13年度の連携協力事業研究については、平成14年6月15日に「連携協力事業研究報告書」にまとめた。

### 平成14年度

- ①4月20日、「連携協力会議専門部会」の開催。
  - ・平成14年度の連携協力事業の検討、同重点的事業の検討。
- ②7月20日、「連携協力会議」の開催。
  - ・21の連携協力事業が実施されることが決まる。
- ③平成15年1月20日、「連携協力会議専門部会」の開催。
  - ・15年度の連携協力事業の検討。
- ④平成15年3月19日、「連携協力会議専門部会」の開催。
  - ・平成15年度の連携事業の検討、同重点事業の検討。
- ⑤平成14年度の連携協力事業研究については、平成15年6月20日に「連携協力事業研究報告書」にまとめた。

## 平成 15 年度

- ①6月11日、「連携協力会議専門部会」の開催。
- ②7月21日、「連携協力会議」。
  - ・平成15年度の「26件の連携事業」の決定、「4件の重点連携事業」の決定。
  - ・連携重点事業「研修講座」の合同開催についての検討。
- ③平成16年1月22日、「連携協力会議専門部会」の開催。
  - ・平成16年度「連携事業」の検討、報告書分担執筆の検討。
- ④平成15年度の連携協力事業研究については、平成16年4月20日に「連携協力事業研究報告書」にまとめた。

## 平成 16 年度

- ①5月13日、「連携協力会議専門部会」の開催。
- ②7月28日、「連携協力会議」。
  - ・平成16年度の「27件の連携事業」の決定、「4件の重点連携事業」の決定。
  - ・連携重点事業「研修講座」の合同開催についての検討。
- ③8月22日、岡山大学教育学部講義棟において第3回「現職教員研修講座」の開催。
- ④平成16年12月20日、岡山大学五十周年記念会館において第1回「連携協力シンポジウム」の開催。

テーマは「優れた教員養成の在り方を求めて」
- ⑤平成17年3月15日、「連携協力会議専門部会」の開催。
  - ・平成17年度「連携事業」の検討、報告書分担執筆の検討。
- ⑥平成18年3月18日、岡山大学教育学部において「学校教員インターンシップ事業シンポジウム」の開催。
- ⑦平成17年3月20日、第1回「連携協力シンポジウム」報告書出版。
- ⑧平成16年度の連携協力事業研究については、平成17年3月31日「連携協力事業研究報告書」出版。

## 平成 17 年度

- ①5月9日、「連携協力会議専門部会」の開催。
- ②7月27日、「連携協力会議」の開催。
  - ・23件の継続事業、4件のスクラップ事業、新規1件事業、3件の重点事業（「学校教員インターンシップ」「夏期研修講座の共同開催」）が承認された。
- ③平成17年8月22日（月）、「夏期研修講座」を、岡山大学五十周年記念会館等を会場に共同開催。
  - ・岡山県内外からのべ1150人の現職教員、大学教員、指導主事、教職希望学生が参加。NHKテレビ放送でも報道された。
- ④平成18年3月11日、「連携協力会議専門部会」の開催。
  - ・平成17年度「連携事業」の検討、報告書分担執筆の検討。
- ⑤平成18年3月16日、岡山大学教育学部において「学力向上支援事業・学校教員インターンシップ事業シンポジウム」の開催。

## 平成 18 年度

- ①5月15日（月）、「連携協力会議専門部会」の開催。
- ②7月25日（火）、「連携協力会議」の開催。
  - ・24件の継続事業、新規1件の事業、3件の重点事業（「学校教員インターンシップ」「夏期研修講座の共同開催」「授業で勝負！」支援事業）が承認された。
- ③平成17年8月21日（月）、「夏期研修講座」を、自然科学棟、教育学部講義棟を会場に共同開催。
  - ・岡山県内外からのべ753人の現職教員、大学教員、指導主事、教職希望学生が参加。NHKテレビ放送でも報道された。
- ④平成19年3月15日、「連携協力会議専門部会」の開催。
  - ・平成19年度「連携事業」の検討、今後の連携協力の在り方。
- ⑤平成19年3月20日、岡山大学教育学部講義棟5102室において「学力向上支援事業・学校教員インターンシップ事業シンポジウム」の開催。

## 平成 19 年度

- ①5月8日（火）、「連携協力会議専門部会」の開催。
  - ・24件の継続事業、新規事業0件、3件の重点事業（「学校教員インターンシップ」「夏期研修講座の共同開催」「授業で勝負！」支援事業）が承認された。また、1件のスクラップ事業（「確かな学力育成小中連携事業」）が承認された。
- ②8月20日（月）、「夏期研修講座」を、自然科学棟、教育学部講義棟を会場に共同開催。
  - ・岡山県内外からのべ237人の現職教員、大学教員、指導主事、教職希望学生が参加。
- ③8月21日（火）、「連携協力会議」を教育学部講義棟、第4会議室で開催。教職大学院の設置予定に伴う「平成20年度からの連携協力の展望」について協議された。
  - また、「平成19年度の連携事業」「平成19年度の連携協力重点事業」が承認された。

## 平成 20 年度

- ①5月7日（水）、「連携協力会議専門部会」の開催。
  - ・岡山大学の改組の関係で、暫定的専門委員と県教育委員会の連携協力担当とで平成21年度の連携協力事業と重点事業を協議した。連携推進委員長は柳原教育実践総合センター長が務めることがきまった。
  - ・21件の継続事業、新規事業0件、2件の重点事業（「学校教員インターンシップ」「夏期研修講座の共同開催」）が承認された。また、「授業で勝負」「確かな学力育成小中連携事業」「英語教員の資質能力向上のための研修（中学校・高等学校）」「情報教育充実のための学生ボランティア派遣」の5件の事業が一定の成果を得たということでスクラップすることが承認された。
- ②8月25日（月）、「夏期研修講座」を岡山大学を岡山大学五十周年記念会館会場に共同開催。
  - ・岡山県内外からのべ231人の現職教員、大学教員、指導主事、教職希望学生が参加。
- ③11月14日 連携協力専門部会  
附属教育実践総合センターにおいて、下記の3点について協議した。
  - ・連携協力会議、専門部会の在り方

連携協力会議は必要に応じて開催してはという意見もあったが、研究科長から毎年開催すべきという方向性が示され、毎年開催することがきまった。専門部会については必要に応じて開催することがきまった。

・教員免許更新制に関する諸課題

10年研修の在り方、夏期研修の在り方について、スクラップの方向で協議されたが、結論は持ち越しとなった。

・特別支援教育の連携

連携協力していく方向で推進していくことがきまった。

④平成21年3月19日、岡山大学教育学部講義棟5102室において「学力向上支援事業・学校教員インターンシップ事業シンポジウム」の開催。

## 平成21年度

①8月3日（月）、「連携協力会議専門部会」の開催

・本年度より、岡山大学教育学部・教育学研究科と岡山市教育委員会との連携協力事業が始まったことから、岡山大学・岡山県教育委員会・岡山市教育委員会の三者合同で専門部会が開催された。

・14件の継続事業、新規事業1件（「高等学校における発達障害支援推進事業」）、1件の重点事業（『教師への道』インターンシップ事業）が承認された。

・終了または中止した事業として、「夏期教員研修講座」「生涯学習施設等での学生の実習（総合教育課程学生インターンシップ）」の2件が承認された。

・課題のある事業として、『教師への道』インターンシップ事業「県総合教育センターにおける研修講座及び発表会の学生・大学教員への公開」「学校における情報教育充実のための学生ボランティア派遣」「中・高等学校美術科の授業づくり」の4件があげられた。

②8月20日、「連携協力会議」の開催

・専門部会と同様に、岡山大学・岡山県教育委員会・岡山市教育委員会の三者合同で連携協力会議が開催された。

・夏期教員研修講座の共同開催について

今後の開催については、専門部会で検討していくこととした。

・県総合教育センターでの情報教育充実のための学生ボランティア派遣について

今後実施される「全学教職コア・カリキュラム」におけるボランティアやインターンシップの中のバリエーションの1つとして位置づける方向で検討していくこととした。

・『教師への道』インターンシップ事業について

「総合大学が担う特色ある教員養成の質保障」について研究科長が概要を説明し、「全学教職コア・カリキュラム」の中に『教師への道』インターンシップ等を組み込み、従来の応用実習・協力校実習は廃止することが確認された。

・連携協力会議について

連携協力会議について、今年度の形態（岡大・県教委・市教委の三者合同）で開催し、専門部会以下の会議等については、適宜、それぞれ行っていくことが確認された。

③平成22年3月20日、岡山大学教育学部本館401室において『教師への道』インターンシップ事業シンポジウム」の開催

## 2 岡山市教育委員会との連携協力

### (1) 目的

岡山大学大学院教育学研究科及び岡山大学教育学部と岡山市教育委員会は、従来から、お互いの事業について連携協力関係にあったが、平成21年4月に岡山市が政令指定都市に移行することとなり、岡山市教育委員会としては、この機に政令市としての権限を發揮した教育を積極的に展開したいと考えた。

そこで、岡山大学大学院教育学研究科及び岡山大学教育学部に所属する、専門的な知見をもたれた大学教員や教職を目指す学生たちの本市各事業における参画を促進できるよう、包括的な協定を結ぶこととした。

本協定においては、教員の養成及び資質・能力の向上並びに教育上の諸課題に対して、岡山大学大学院教育学研究科及び岡山大学教育学部と岡山市教育委員会が相互に連携協力し、その成果を生かして双方の教育の充実・発展を図ることを目指している。

### (2) 発足から平成21年度までのあしあと

#### ○「岡山市教育委員会・岡山大学の連携・協力に関する協定書にかかる協議」

平成20年12月2日（火）15:30－17:45 岡山大学教育学部長室

（参加者）岡山大学……高橋研究科長，柳原副研究科長（教育委員）

#### ○合意事項

- ・担当者連絡会を充実させ、形式的な会議は極力省略する。連携する内容は、以下の5点を柱とする。
  - (1) 教員の養成に関すること
  - (2) 教員の研修に関すること
  - (3) 幼児児童生徒への支援を含む，学校教育上の諸課題への対応に関すること
  - (4) 教育研究の協力に関すること
  - (5) その他両者が必要と認めること
- ・まずは、既存の学校支援ボランティア制度を活用し，人材の需要と供給について情報を交換しながら，大学生のボランティアの派遣を促進する。
- ・事業連携における報酬の扱いについて
  - ・学生ボランティアは，本人が通える学校を前提として無報酬とする。
  - ・免許を保有している大学院生には，規定に沿って報酬を支払う。
  - ・大学教員に派遣を申請した場合は，原則，規定に沿って報酬を支払う。

○以後，大学と市教委とで連絡を取り合いながら協定書案を策定

○2月教育委員会定例会で協定締結を可決

平成21年2月24日（火）14:00－ 岡山市教育委員会事務局教育長室

○「岡山大学大学院教育学研究科及び岡山大学教育学部と岡山市教育委員会との連携協力に関する協定書」調印式

平成21年3月13日（金）13:00－ 岡山市教育委員会事務局教育長室

## ○取り交わした協定書の内容

### 岡山大学大学院教育学研究科及び岡山大学教育学部と 岡山市教育委員会との連携協力に関する協定書

#### (目的)

第1条 岡山大学大学院教育学研究科及び岡山大学教育学部（以下「甲」という。）と岡山市教育委員会（以下「乙」という。）とは、教員の養成及び資質・能力の向上並びに教育上の諸課題に対応するため、相互に連携協力して研究・協議を行うとともに、その成果を生かして、双方の教育の充実・発展に寄与することを目的として、次のとおり協定を締結する。

#### (実施機関)

第2条 目的に記載された連携協力は、甲（その附属機関も含む。以下同じ。）及び乙（その所管する教育機関も含む。以下同じ。）との間で実施する。

#### (連携協力の内容)

第3条 甲及び乙が連携協力して実施する内容は、次のとおりとする。

- (1) 教員の養成に関すること。
- (2) 教員の研修に関すること。
- (3) 幼児児童生徒への支援を含む学校教育上の諸課題への対応に関すること。
- (4) 教育研究の協力に関すること。
- (5) その他両者が必要と認めること。

#### (連携協力会議等)

第4条 前条に規定する連携協力の内容を協議するため、連携協力会議等を設置する。

2 連携協力会議等の設置については、別に定める。

#### (方法、経費等)

第5条 職員の派遣並びに甲及び乙がそれぞれが有する施設等の利用については、業務に支障のない限りにおいて相互に便宜を図るものとする。

2 連携協力の実施に要する経費は、原則としてそれぞれが負担する。ただし、職員の派遣経費は要請した側が負担する。

#### (有効期間)

第6条 この協定書の有効期限は、協定締結の日から、平成22年3月31日までとする。ただし、この協定書の有効期間満了の日の1箇月前までに、甲及び乙のいずれからも終了又は変更の申し入れがないときは、さらに1年間更新するものとし、その後も同様とする。

#### (補則)

第7条 この協定書に定めるもののほか、連携事業の細目その他必要な事項については、甲及び乙が協議して別に定めるものとする。

2 この協定書に定める事項に疑義が生じた場合、甲及び乙は協議してその解決を図るものとする。

この協定の締結を証するため、本協定書2通を作成し、甲乙それぞれが署名押印のうえ、各自1通を保有するものとする。

平成21年3月13日

岡山大学大学院教育学研究科長  
岡山大学教育学部長

岡山市教育委員会教育長

## ○平成21年度の活動

政令指定都市移行に伴うさまざまな事務処理と並行しながら、協定の有り様を探っていたため、協定書締結までに、特に、ワーキンググループを設けての連携内容の精査等が行えなかった。そこで21年度は、以下の既存事業を利用して、大学教員及び学生ボランティアの参画推進が図られるよう、活動を実施することとした。

○岡山市学校支援ボランティア制度

○学力・授業力アップ支援事業

○授業で変わる！いきいき岡山っ子育成事業における「いきいき学校園づくり」

なお、8月20日（木）に大学・県・市合同の連携協力会議を実施した。

### 3 平成 22 年度の連携協力会議委員・専門部会委員一覧表

#### (1) 岡山県教育委員会

##### 連携協力会議委員一覧表

所 属・ 職	氏 名	備 考
岡山県教育委員会・教育長	門野八洲雄	
岡山県教育庁・教育次長	竹井 千庫	
岡山県教育庁・教職員課長	小田 幸伸	
岡山県教育庁・指導課長	今井 康好	
岡山県教育庁・特別支援教育課長	黒山 靖弘	
岡山県教育庁・生涯学習課長	廣田 貢	
岡山県教育庁・福利課長	村木 生久	
岡山県総合教育センター・所長	木多 信俊	

##### 専門部会委員一覧表

所 属・ 職	氏 名	備 考
岡山県教育庁指導課・副課長	小林 康広	
岡山県教育庁指導課・総括副参事	藤枝 茂雄	義務教育指導班
岡山県教育庁指導課・総括副参事	赤松 一樹	高校教育指導班
岡山県教育庁指導課・総括主幹	文谷 元信	職業教育指導班
岡山県教育庁指導課・指導主事	豊田 晃敏	
岡山県教育庁特別支援教育課・総括副参事	中村 誉	
岡山県教育庁生涯学習課・総括副参事	貝原 淳一	
岡山県教育庁福利課・総括主幹	石居美由紀	
岡山県総合教育センター・指導主事（副参事）	野崎 誠二	
岡山県総合教育センター・指導主事	土田 雅己	
岡山県総合教育センター・指導主事	定久 照美	

## (2) 岡山市教育委員会

### 連携協力会議委員一覧表

所 属・ 職	氏 名	備 考
岡山市教育委員会・教育長	山脇 健	
岡山市教育委員会事務局・教育次長	森本 茂	
岡山市教育委員会事務局・審議監(学校教育担当)	小野 恭弘	
岡山市教育委員会事務局・学事課長	山本 孝治	
岡山市教育委員会事務局・指導課長	安井 正郎	
岡山市教育委員会事務局・生涯学習課長	伊東 眞琴	
岡山市総合教育センター・所長	青山 順子	
岡山市教育委員会学事課・課長補佐	三宅 泰司	
岡山市教育委員会指導課・課長補佐	長瀬 尚樹	
岡山市教育委員会指導課・課長補佐	平井 秀尚	

### 専門部会委員一覧表

所 属・ 職	氏 名	備 考
岡山市教育委員会事務局・審議監(学校教育担当)	小野 恭弘	
岡山市教育委員会事務局・学事課課長補佐	三宅 泰司	
岡山市教育委員会事務局・指導課課長補佐	長瀬 尚樹	
岡山市教育委員会事務局・指導課課長補佐	平井 秀尚	
岡山市教育委員会事務局・生涯学習課課長補佐	中吉浩一郎	
岡山市教育委員会事務局・生涯学習課主任	川上 卓士	
岡山市総合教育センター・所長補佐	堀井 博司	



(3) 岡山大学教育学部・大学院教育学研究科

連携協力会議委員一覧表

所 属・ 職	氏 名	備 考
岡山大学大学院教育学研究科長・教授 (岡山大学教師教育開発センター・センター長)	加賀 勝	
岡山大学大学院教育学研究科・教授 (岡山大学教師教育開発センター・副センター長)	高橋 香代	
岡山大学大学院教育学副研究科長・教授	大橋 和正	附属学校園部長
岡山大学大学院教育学研究科・教授	伊土 耕平	教務委員会委員長
岡山大学大学院教育学研究科・教授	仲矢 明孝	教育実地委員会委員長
岡山大学大学院教育学研究科・教授	虫明眞砂子	就職・学生委員会委員長
岡山大学大学院自然科学研究科・教授	高橋裕一郎	岡山大学教職課程 運営委員会代表者
岡山大学教師教育開発センター・教授(特任) (岡山大学教師教育開発センター・副センター長)	山根 文男	
岡山大学教育学系事務部・事務長	高月希一郎	

専門部会委員一覧表

所 属・ 職	氏 名	備 考
岡山大学教師教育開発センター・教授	高橋 香代	副センター長・総務担当
岡山大学教師教育開発センター・教授(特任)	山根 文男	副センター長・連携担当
岡山大学教師教育開発センター・准教授	高旗 浩志	教師教育開発部門
岡山大学教師教育開発センター・准教授	山崎 光洋	教師教育開発部門
岡山大学教師教育開発センター・准教授	笠原 和彦	教師教育開発部門
岡山大学教師教育開発センター・教授(特任)	松原 泰通	教職支援部門
岡山大学教師教育開発センター・教授(特任)	小川 潔	教職支援部門
岡山大学教師教育開発センター・教授(特任)	山根 文男	教職コラボレーション部門
岡山大学教師教育開発センター・教授(特任)	曾田佳代子	教職コラボレーション部門
岡山大学教師教育開発センター・教授(特任)	江木 英二	教職コラボレーション部門
岡山大学教師教育開発センター・教授(特任)	安原 洋二	理数系教員養成事業部門
岡山大学教師教育開発センター・教授(特任)	荒尾 真一	理数系教員養成事業部門
岡山大学教育学系教職支援グループ・主査	山岡 勇仁	

#### 4 平成22年度の活動

##### (1) 岡山市教育委員会との専門部会

1 日 時 平成22年5月31日(月)14:30～16:00

2 場 所 岡山大学教育学部講義棟 1階会議室

3 内 容

- (1) あいさつ ○ 岡山大学教師教育開発センター 高橋 香代 副センター長  
○ 岡山市教育委員会事務局 小野 恭弘 審議監

##### (2) 事業説明

岡山大学と岡山市教育委員会との連携事業について、岡山市教育委員会の各課担当者から以下の事業について資料に基づき説明がなされた。

- ① 習熟度別サポート事業（学事課）
- ② 授業で変わる！ いきいき岡山っ子育成事業（指導課）
- ③ 学力・授業力アップ支援事業（指導課）
- ④ 学校支援ボランティア（生涯学習課）
- ⑤ 教職員研修（総合教育センター）

##### (3) 協 議

(2) の各事業について、岡山大学からは次のような意見が出された。

###### ①習熟度別サポート事業について

- ・大学としては、10名ぐらいがこの事業に関わることができると有難い。
- ・時間と距離がネックになり、なかなか学校のニーズとマッチしない。

###### ④学校支援ボランティアについて

- ・学校支援ボランティアには500人以上登録しているが、実際に学校に派遣されているかどうかの把握ができていない。
- ・本年度、大学ではボランティアビューローを立ち上げ、学校支援ボランティアへの参加、意義の徹底を図っている。そこで、学生の派遣状況の把握、課題の把握を行っていきたい。
- ・学生が学校に入るに当たって、身分証明に当たるネームプレートも大学で用意している。
- ・ボランティアに参加すると、本年度から単位が取得できるようにした。
- ・時間と距離がネックになり、なかなか学校のニーズとマッチしない。
- ・学生の学校支援ボランティアの活動状況については、担当課で調査する。

(4) 岡山大学から今後計画について説明

概算要求に当たり、今後5年計画で事業を立案したいので協力をお願いしたい。  
事業概要は、次の通り。

- ① 中学校区で取り組む生きる力・学校力向上事業(いきいき学校園づくりと同義)
- ② 学校の課題に応じた校内研修(大学の教員を派遣)
- ③ 教職実践インターンシップ生派遣(年間を通して週1回、大学4年生を派遣、子供たちを理解するために)

4 その他

- ・岡山大学から、本年度、全学を対象とした教師教育開発センターを立ち上げたことをお知らせした。

(2) 岡山県教育委員会との専門部会

1 日 時 平成22年7月5日(月) 14:30~16:00

2 場 所 岡山大学教育学部講義棟 1階会議室

3 内 容

- (1) あいさつ ○岡山大学教師教育開発センター 高橋 香代 副センター長  
○岡山県教育庁指導課 小林 康広 副課長

(2) 説 明

①連携協力会議の組織について

岡山大学、岡山県教育委員会双方から説明があり、特に問題はない事を確認した。

②平成21年度の連携協力事業の成果と課題について

ア、事業の状況報告と今後の方向性について

○資料に基づき、「平成21年度連携協力事業」「主な連携事業の歩み」を各担当から報告。実施状況は概ね良好、いくつかの課題はあるが、今後とも継続の方向で確認した。

○昨年度の課題について

- ・岡山県、岡山大学、岡山市の三者が実施するインターンシップ・ボランティア事業を、学生も学校現場も混同しているため、わかりやすく整理して示す必要があることを確認した。これについては、「インターンシップ・ボランティアガイド」を作成し、学生説明会等で周知。また県教育庁指導課のホームページからダウンロードできるようにしていることの説明があった。
- ・「夏期教員研修講座」(教育学部と県との共同開催)について、休止にするかどうか担当レベルで検討をすることになっていた。

これについて、担当レベルでは、免許更新講習がどうなるか分からなくなってきたこともあり、『中止』ではなく「休止」としたいとの見解で一致した。岡山大学としては、財政的なこともあるし、免許更新講習への対応もあり、単に今までやっているからというのでは動きにくい。県からのニーズ（具体的な提案）が欲しいところ。今後、免許更新講習の対応をどうしていくのか、全学化した事業の行方を見極めながら、検討していく必要あり。とりあえずは休止で。

- （４）その他、両者が必要と認める事項の②情報化に対応した教育の充実「情報教育推進学生ボランティア活用事業」（学校における情報教育充実のための学生ボランティア派遣）が、平成20年度から学生参加の実績なし。

このことについては、大学側の担当者に継続するかどうかを確認することにした。

#### イ、課題と今後の対応について

- 事業を整理整頓していく必要がある。例えば、（３）学校教育上の諸課題への対応に関する事項の④大学、大学院での教員養成カリキュラムの改善など、漠然とした事業は入れない方がよい。

### （３）協 議

#### ①連携協力会議に向けて

##### ア、平成22年度の連携協力事業について

- 平成22年度の新規事業はない。
- 平成22年度の重点事業について
  - ・昨年度からの継続で、「教師への道」インターンシップ事業をおく。
  - ・学生全員の参加の方向へ。他学部の高専での活動へと発展させていきたい。

##### イ、連携協力会議の要項等の改訂について（提案事項）

- 急がず、じっくりと検討を。本年度から、教師教育開発センターが、全学のセンターとなり、教育学部だけでなく全学連携教員養成として考える必要がある。

##### ウ、その他

- 連携協力会議の議題（案）について
  - ・連携協力事業の簡単な報告に続いて、主に次の4点。
    - 「教職大学院（2年目）の評価の報告」、「免許更新講習の展望について」
    - 「概算要求について」、「連携協力会議の要項の改訂について」

#### ②その他

- ア、岡山大学教師教育開発センターについて概要の説明。

### (3) 3者の合同連携協力会議

1 日 時 平成22年10月6日(水) 10:00～11:30

2 場 所 岡山大学教育学部講義棟 1階会議室

3 内 容

- (1) あいさつ
- 岡山大学大学院教育学研究科 研究科長 加賀 勝
  - 岡山県教育委員会 教育次長 竹井 千庫
  - 岡山市教育委員会 教育長 山脇 健

(2) 協議事項

#### ①教職大学院の評価と検討課題について

岡山大学教育学部教職実践専攻運営委員会委員長より、次の説明があり確認された。

- ・現職教員の派遣について、今年度は2名減となっているが、良い結果が出ているので、派遣数を元に戻すよう御検討いただきたい。
- ・現職教員院生の2年目の現任校における職務について、現任校に戻った際に中心的な役割を果たすポジションに位置づけられた先生は教職大学院の研究を行う上で成果が出ているので、現任校での職務について御検討いただけるとありがたい。
- ・教育実習について、中学校1校、小学校3校、特別支援学級・部活動の関係で小・中学校各1校にお世話になっているが、引き続きお願いしたい。また、高校での実習も検討していただきたい。その際に、進学校だけでなく、専門高校等実習に行ける校種を増やしていただきたい。
- ・ストレートマスターの教員採用試験について、各県によって採用方法に差があるので他県とのバランスを取っていく必要がある。

#### 【岡山県教育委員会からの意見】

- ・年間130万円の授業料がネックとなり、優秀な人材を派遣することが難しい状況である。
- ・講師の充実を図る等をして、魅力的なプログラム作りをお願いしたい。
- ・教員採用に関し、県外出身の学生に岡山県に残ってもらうためにはどうすればよいか、優秀な人材確保のため岡山大学と連携を取りながら検討したい。

#### ②教師教育開発センターの取り組みについて

ア、理数系教員(CST)養成事業の実施について

- ・研究科長より、資料にもとづき理数系教員(CST)養成事業の実施について説明があり、確認された。
- ・岡山県教育委員会・岡山市教育委員会には、CST評価委員会・CST運営委員会・CST実施委員会のメンバーとして、今後とも御協力いただきたい。

#### 【岡山県教育委員会からの意見】

- ・学生だけでなく、現職の教員への研修等も併せて連携していただけるとありがたい。

【岡山市教育委員会からの意見】

- ・C S Tで養成した資質の高い学生を県内で確保するため、採用システムについて今後協議させていただきたい。

イ、全学教職課程について

- ・副センター長より資料により説明があり、確認された。
- ・4年次の教職実践演習までに教職について理解を深め、インターンシップ事業に参画させていただきたいので、岡山県教育委員会・岡山市教育委員会にご協力いただきたい。
- ・1年次のオリエンテーションが有効に機能している。

ウ、岡山県・岡山市教育委員会との今後の連携の方向性について

- ・副センター長より資料の通り説明があり、確認された。

【岡山市教育委員会からの意見】

- ・全学教職課程の学生の実習について、今後連携して充実させていく必要がある。
- ・特別支援にかかわった対応やこれからの世の中を見すえた上での連携内容を今後協議していく必要がある。

【岡山県教育委員会からの意見】

- ・現職教員の質向上として、長期休業中に教職大学院で取り組んでいる内容を特別講義として開講できればありがたい。
- ・インターンシップを岡山市と連動して進め、外部資金を導入して講師を充実させて行けたら良い。
- ・学校教育だけでなく、社会教育機関や福祉機関と連携し、教員になった際に学校現場で様々なアイデアを出せたりコーディネートができる実践的な力を養っていくことが必要である。

エ、岡山県・岡山市教育委員会との覚書・協定書の改正について

- ・副センター長より資料の通り説明があり、協議の結果、今後改正に向けて動いていくことが了承された。

オ、その他

- ・岡山県教育委員会より資料が提出され、担当者より説明があり、確認された。
- ・岡山市教育委員会より資料が提出され、担当者より説明があり、確認された。

(3) 報告・連絡事項

①合同連携協力会議の組織変更（岡山大学）について

- ・副センター長より、理数系教員（C S T）養成事業の実施に伴い、教師教育開発センターに「理数系教員養成事業部門」が新しく設置され、これに伴い新たに2名の教授（特任）が9月1日付で採用されることが報告され、確認された。



## 1 平成21年度からの継続事業

## (1) 教員養成に関する事項

- ① 総合教育センターにおける研修講座及び発表会の学生・大学教員への公開
- ② 現職教員等による教員養成への協力
- ③ 「教師への道」インターンシップ事業
- ④ 学生による学力向上支援への協力

## (2) 教員研修に関する事項

- ① 新学習指導要領家庭科授業への提案ー中国地区5県の家庭科実践研究を中心としてー
- ② 中・高等学校美術科の授業づくり

## (3) 学校教育上の諸課題への対応に関する事項

- ① 「子どもほっとライン事業(子ども電話相談)」への多面的な連携協力
- ② 生きる力応援プラン「夢さがしの旅」推進事業
- ③ 教職員のメンタルヘルス対策
- ④ 大学、大学院での教員養成カリキュラムの改善
- ⑤ 高等学校における発達障害支援推進事業

## (4) その他、両者が必要と認める事項

- ① 附属学校園を活用した研修講座の開催
- ② 県生涯学習大学(のびのびキャンパス岡山)「大学院コース」講座の開設

## 2 平成22年度の連携重点事業

## (1) 「教師への道」インターンシップ事業





(1) 教員養成に関する事項

① 総合教育センターにおける研修講座及び発表会の学生・大学教員への公開

1 本事業の目的と概要

本事業は、岡山県総合教育センターが実施する研修講座を「学生及び大学教員の参加可能研修講座」の対象としたり、教育研究発表大会を公開したりするなど、平成12年度から継続実施しているものである。教職員の指導力や資質向上のための研修講座や、センター職員が専門的な分野での取組を広めるために行っている教育研究発表大会に学生が参加することにより、具体的な教育活動や学校の現状などに直接触れるとともに、学習指導や生徒指導等への理解を深めることを目的としている。また、教員を志望する学生を受け入れることで、現職教員の教職に対する自覚が高まり、研修の充実・活性化が図れることを期待している。

2 平成22年度に開設した「学生及び教員の参加可能研修講座」

<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内研修を充実させるための研修</li> <li>・学校組織マネジメント</li> <li>・キャリア教育</li> <li>・学級経営（HR経営）</li> <li>・小学校国語</li> <li>・中学校国語</li> <li>・高等学校国語</li> <li>・小学校算数</li> <li>・中学校数学</li> <li>・高等学校数学</li> <li>・小学校理科</li> <li>・中学校理科</li> <li>・高等学校理科（物理・化学・生物・地学）</li> <li>・小学校社会</li> <li>・中学校社会</li> <li>・高等学校地理歴史・公民</li> <li>・小学校体育（体づくり運動・ボール運動・表現運動・陸上運動）</li> <li>・中・高等学校体育（体育理論・ダンス・剣道・柔道）</li> <li>・小学校図画工作</li> <li>・中・高等学校美術</li> <li>・小学校音楽</li> <li>・中・高等学校音楽</li> <li>・小学校外国語活動</li> <li>・中学校英語</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高等学校英語</li> <li>・小学校家庭</li> <li>・中学校技術・家庭（技術・家庭）</li> <li>・高等学校家庭</li> <li>・運動部活動指導者等研修（トレーニング・ソフトテニス・軟式野球）</li> <li>・総合的な学習の時間</li> <li>・環境学習</li> <li>・いのちの教育</li> <li>・人権教育</li> <li>・高等学校普通教科情報</li> <li>・道徳教育</li> <li>・特別活動</li> <li>・小学校授業づくり</li> <li>・生徒指導・教育相談（基礎・発展）</li> <li>・生徒指導・教育相談パワーアップ</li> <li>・実践生徒指導</li> <li>・特別支援教育授業づくり</li> <li>・特別支援教育教育相談</li> <li>・重度・重複障害児の理解と支援</li> <li>・アセスメント（特別支援教育）</li> <li>・情報セキュリティ管理対策</li> <li>・情報セキュリティ技術対策</li> <li>・授業に生かすはじめてのプレゼンテーション研修</li> <li>・情報モラル指導（授業実践編）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知っておきたい学校教育における著作権マナー</li> <li>・はじめてのeラーニング簡単な教材づくり</li> <li>・気軽に活用！はじめてのICT活用授業入門</li> <li>・基礎基本の習得！フラッシュ型教材活用</li> <li>・知っておきたい！ICT器機・ソフト研修</li> <li>・児童生徒に情報活用能力を育成するための授業づくり</li> <li>・めざせ授業名人！授業分析入門</li> <li>・アンケート（自由記述文）分析入門</li> <li>・今日から始める学校情報化推進！管理職、校内研修リーダー等研修</li> <li>・はじめての小学校英語ノート+電子黒板活用</li> <li>・Webサイト・eラーニングを活用した授業づくり</li> <li>・NHK学校放送・Webサイトを活用した授業づくり</li> <li>・メディアを活用した言語力育成</li> <li>・eラーニング活用で学力向上</li> <li>・タブレットPCで簡単！授業活用</li> <li>・大きく見せてわかりやすく！実物投影機活用研修</li> </ul>
---	--	--

### 3 学生の研修講座への参加状況

#### (1) 学生の参加した研修講座（かっこ内は大学教員）

学 生 の 参 加 講 座 名	期 日	人 数
生徒指導・教育相談研修講座（発展）第2日	7月 8日	0（1）
実践生徒指導研修講座2	7月30日	1（1）
生徒指導・教育相談研修講座（基礎）第2日	8月 3日	1（1）
高等学校家庭研修講座4	8月10日	3
小学校家庭研修講座2	8月11日	2
中学校技術・家庭研修講座（家庭）3	8月11日	2
実践生徒指導研修講座3	8月20日	1（1）
高等学校国語研修講座5	9月29日	1
生徒指導・教育相談パワーアップ研修講座第2日	10月 5日	1（1）
生徒指導・教育相談研修講座（発展）第3日	10月22日	0（1）
運動部活動指導者等研修講座（トレーニング）1	10月26日	1
生徒指導・教育相談研修講座（発展）第4日	11月18日	0（1）
生徒指導・教育相談パワーアップ研修講座第4日	12月10日	2（1）
学 生 の 参 加 延 べ 人 数		15（8）

#### (2) 参加学生の推移

年度	設定講座数	参加学生数	年度	設定講座数	参加学生数
H12	16	28	H18	47	13
H13	34	17	H19	76	2
H14	37	28	H20	20	4
H15	42	37	H21	45	8
H16	31	17	H22	64	15
H17	43	60			

### 4 今年度のまとめ

「学生及び大学教員の参加可能研修講座」の開設に当たっては、可能な限り多くの教科や領域の研修講座を対象とすることとしている。今年度は、7月中旬以降の研修講座を対象とし、64講座を参加可能講座として紹介した。複数日開講している研修講座もあり、日数にすると述べ160日となった。

学生や大学教員の参加があった13講座は、教科指導、教育相談・生徒指導の研修講座であり、より実践的な内容へのニーズが高いと感じられた。大学教員の参加（本年度は8名）に伴い、学生が参加する研修講座も見られた。今年度は、教育研究発表大会にも大学教員や学生の参加があった。来年度も研修講座や教育研究発表大会に、少しでも多くの学生や大学教員に積極的に活用してもらえるように連携を進めていきたい。

## (1) 教員養成に関する事項

### ② 現職教員等による教員養成への協力

---

#### 1 はじめに

岡山大学は、平成 21～23 年度大学教育推進 G P 「総合大学における特色ある教員養成の質保証」の採択を受け、平成 22 年 4 月には教員養成における全学的組織「教師教育開発センター」を設置した。教職を目指す学生の教育実践力の質を保証していくことを目的に、全学的な教員養成の取り組みがよいよ本格的にスタートした。今後は、今日的教育課題により密接に関連した大学での講義・演習、学校現場での実習、地域での活動等の充実や発展が望まれており、今まで以上に教育委員会や現職教員との連携や協力、協働の取り組みが重要性を増してきている。

#### 2 平成 22 年度の現職教員等による教員養成教育への実績

##### (1) 岡山県教育委員会・岡山市教育委員会による協力・支援

- ① 大学における講義担当
- ② 大学における教育実習必修授業科目「教育実習基礎研究」での講演や演習  
… 教科指導（指導案作成、模擬授業）、人権教育、特別活動、教育の今日的課題等。
- ③ 「教育実習」、「養護実習」の事前・事後指導講話
- ④ 『「教師への道」インターンシップ事業』（岡山県教育委員会）の実施
- ⑤ 「学校支援ボランティア事業」（岡山市教育委員会）の実施

##### (2) 附属学校園による協力・支援

- ① 大学における講義担当（集中講義を含む）
- ② 大学における「教育実習」、「養護実習」の事前・事後指導
- ③ 附属学校園における「教育実習」、「養護実習」の事前・事後指導  
… 附属学校園の教員の授業参観、教科指導等の内容も含む。
- ④ 附属学校園における実習生受け入れと実習本体の事前・事中・事後指導
- ⑤ 附属学校園における「附属インターンシップ」  
… 附属幼稚園、附属小学校においては、主免実習終了後（3 年次）に希望者が引き続いて週に 2 日程度、インターンとして学校職務を体験している（翌年 3 月中旬まで）。また、附属特別支援学校では、4 年次後期にも学生を受け入れている。

##### (3) 岡山県総合教育センターによる協力・支援

- ① 岡山大学大学院教育学研究科教職実践専攻（教職大学院）の新卒院生及び大学教員の岡山県総合教育センター主催研修講座への参加  
… 「実践生徒指導研修講座」、「生徒指導・教育相談研修講座（基礎・発展コース）」及び「生徒指導・教育相談パワーアップ研修講座」の講義聴講（11 回）。

(4) 実習協力学校園による協力・支援

①実習生受け入れと実習本体の事前・事中・事後指導

②3年次の「養護実習Ⅲ」、4年次の「養護実習Ⅳ（保健実習）」、「教育実習Ⅳ（協力校実習）」、「学校教員インターンシップ」の大学における事前・事後指導

… 平成23年3月19日には、教育委員会や実習協力学校園長、附属学校園及び大学の教員等も参加して、「学校教員インターンシップ」に参加している学生（他大学も含む）によるパネルディスカッションや共同討論等のシンポジウムを開催（岡山県『教師への道』インターンシップ事業』と共催）。

③教職大学院の新卒院生の実習校

… 教職大学院の「課題発見実習」、「課題解決実習」、「インターンシップ（特別支援教育、部活動）実習」、「教育実践研究Ⅱ」では、連携協力校である岡山市立岡山中央小学校、石井小学校、三門小学校、大野小学校、岡山中央中学校、石井中学校及び倉敷市立新田中学校の各校が新卒院生の実習や部活動指導等への参画を受け入れ、学生の指導・支援を担う。

(5) 公立学校教員等による協力・支援

①大学における講義担当（「教育実習基礎研究」、「教科教育法」、「教職科目」を中心に）

… 公立小・中学校教諭のみならず、教育学部以外の学部（文学部、法学部、経済学部、工学部、農学部、理学部、環境理工学部）の教職課程履修学生の授業（「教育実習基礎研究」）では、県立高等学校教諭等による高等学校教科別指導を実施。

… 附属学校園での勤務経験のある教諭や退職校長を中心に、授業科目「教育実習基礎研究」の中で教科指導及び指導案作成についての演習や模擬授業を行っている。

3 今後の展望と課題

平成22年度入学生から、4年次に必修化される「教職実践演習」のシラバス（例）を右に示した。この授業は、教育学部では4年次通年、その他の学部では4年次後期に行われる。また、岡山大学全学教職カリキュラムの理論と実践の往還という観点から、その授業に連動して「教職実践インターンシップ実習」を位置づけている。新たに位置づけられたこの授業の中で、「教職実践ポートフォリオ」によって確認された学生に不足している教育実践力を、どのような演習内容や授業形態で身につけさせていくのか。また、どの時期にどんな内容の実習を行うのか等、多忙な学校現場や教育委員会、大学間相互の共通理解が必要になる。それぞれのニーズや現状の確認をはじめ多くの議論の中で、今日的な教育改革を実現していくための関係性の再構築が求められている。

授業科目名	教職実践演習(中・高)	単位数	2単位	担当教員名	
科目	教職に関する科目(教職実践演習)				
履修時期	4年次後期	履修履歴の把握	○	学校現場の意見聴取	○
受講者数	30人				
教員の連携・協力体制					
教職に関する科目担当者(教職経験者)を中心として、教科に関する科目担当者が協力して行う。					
授業の到達目標及びテーマ					
教員として最小限必要な資質能力(「使命感・責任感・教育的愛情」「社会性・対人関係能力」「生徒理解力」「教科指導力」)をどの程度形成しているかを確認し、不足している資質能力を身につける。					
授業の概要					
学生に教員として最小限必要な資質能力の形成状況を確認させ、自己教育課題を自覚させた上で、フィールドワークを通して経験、学習したことを省察したり共有したりする機会(グループワーク、ワークショップ、ロールプレイング、プレゼンテーション、ケーススタディなど)を提供する。					
授業計画					
第1回 「教職実践演習」の目的、意義、授業運営の説明					
第2回 教員として必要な資質能力の自己評価・相互評価(グループワーク)					
第3回 自己評価に基づく自己教育課題の認識(ワークショップ)					
第4回 フィールドワークを基にした発表(学習指導)(プレゼンテーション)					
第5回 学習指導に関する自己教育課題に基づく授業設計(グループワーク)					
第6回 学習指導案の検討(ワークショップ)					
第7回 学習指導案に基づく模擬授業(ロールプレイング)					
第8回 育てたい子ども像と学級経営案の作成・検討(グループワーク)					
第9回 生徒指導、キャリア教育の在り方(ケーススタディ)					
第10回 フィールドワークを基にした発表(生徒指導)(プレゼンテーション)					
第11回 学校組織における教員(グループワーク)					
第12回 学校と家庭・保護者及び地域との連携(ケーススタディ)					
第13回 他校種(小学校、特別支援学校、大学)との連携(ケーススタディ)					
第14回 フィールドワークを基にした発表(コーディネート・マネジメント)(プレゼンテーション)					
第15回 教員として必要な資質能力の最終的自己評価					
テキスト					
「教職実践ポートフォリオ」、『中学校学習指導要領解説総則編、教科編』、『高等学校学習指導要領解説総則編、教科編』					
参考書・参考資料等					
授業の中で適宜指示する。					
学生に対する評価					
意欲及び実践的態度:50%、発表・レポート:50%					

## (1) 教員養成に関する事項

### ③ 「教師への道」インターンシップ事業

---

#### 1 目標

大学、大学院及び短期大学に在学する学生が、岡山県内の公立の幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校でのインターンシップ又はボランティアの活動を通じて、教職への適性を確認し、多様化及び複雑化する学校教育への理解を深め、実践的指導力の基礎を身につけることを目的とする。

#### 2 位置付け

教員を志望する学生を対象に、岡山県教育委員会主管事業として、平成20年度から新たに実施した。東京都や千葉県等の教育委員会が優れた教員の確保のために学生を対象とした研修を始めているが、岡山県教育委員会のこの事業は、大学と連携しながら進める点、また、優れた教員の確保のためではなく、「将来の教員の資質向上」を目的としている点で大きな違いがある。

本事業は、「将来の教員の資質向上」を目的とすることから、本連携協力事業の教員養成に関する事項の趣旨に合致することから、昨年度、新規事業として実施し、本年度は重点事業として位置付けている。

本事業の実施により、これまで連携協力事業としてきたいくつかのインターンシップ又はボランティアに関する事業は、全て本事業に統合し一元化することとした。詳細については重点事業として後述の内容を確認されたい。

#### 3 内容

事業の内容としては、大きく分けて、①学校現場における実地体験（インターンシップ又はボランティア）と、②県教育委員会の企画・運営による「教師への道」研修との2つがある。

##### ① 学校現場における実地体験（インターンシップ又はボランティア）

県立学校については、県教育委員会が、市町村立の学校園については、市町村教育委員会が、学生と学校園の仲介役となる。

インターンシップ、ボランティアのいずれにおいても、学校園での活動の期間、曜日、時間帯、そして活動内容の全てについて、学生と学校園の間で協議して決めることとしている。詳細については、重点事業として後述の内容を参照されたい。

##### ② 「教師への道」研修

①の学校現場における実地体験としてインターンシップに参加している学生のうち、希望する者を対象に実施している。

学校現場の実態に即した講義や実践的な研修、グループ協議などをおし、学校園での教育活動の体験に必要な知識の獲得や技能の習得を図るとともに、教師として必要な態度、豊かな人間性等を養うことを目的に実施している。

具体的には、年7回、県教育委員会が企画・運営している。

平成22年度の「教師へ道」研修は次のとおりである。

平成22年度「教師への道」 研修 の日程・内容等

研修	月日	曜日	テーマ・内容等	会場・講師ほか	
第1日	7 / 19	月	<b>開講式・課題設定</b>		於：岡山県生涯学習センター
			午前	【開講式】①挨拶 ②ガイダンス ③先輩による講演	「教師への道」研修の先輩
			午後	【グループ協議】①インターンシップに期待 すること ② 課題設定	指導・助言 県教育庁指導課
第2日	8 / 1	日	<b>「教師としての子どもへのまなざし」</b>		於：岡山県生涯学習センター
			午前	【講義】1 「児童生徒指導の視点」 【講義】2 「特別支援教育の視点」	1 県教育庁指導課 2 県教育庁特別支援教育課
			午後	【グループ協議】 教師として大切なもの	指導・助言 県教育庁指導課
第3日	8 / 29	日	<b>「よりよい教師になるために」</b>		於：ピュアリティーまきび
			午前	【講義・演習】 コーチング研修 「よりよい教師を目指して」	ビッグバン・ファクトリー 代表理事 松田隆之
			午後	【グループ協議】 よりよい教師になるために必要なもの	指導・助言 県教育庁指導課
第4日	9 / 5	日	<b>「よい授業とは」</b>		於：岡山県生涯学習センター
			午前	【講義・演習】 「よりよい授業とは」	授業学研究所 所長 大矢 純
			午後	【グループ協議】 「よりよい授業を目指して ～模擬授業に向けて～」	指導・助言 県教育庁指導課
第5日	11 / 21	日	<b>「模擬授業・研究協議」</b>		於：鳥城高校、県生学セン
			午前	【グループ別】 模擬授業・研究協議	指導・助言 県教育庁指導課
			午後	【代表】 模擬授業・研究協議	
第6日	12 / 12	日	<b>中間報告・情報交換会</b>		於：岡山県生涯学習センター
			午前	模擬授業・研究協議	指導・助言 県教育庁指導課
			午後	インターンシップ中間報告・情報交換会	指導・助言 県教育庁指導課
第7日	3 / 19	土	<b>「インターンシップ・シンポジウム」</b>		於：岡大教育学部
				1 実践発表 2 ミニ講演 3 パネルディスカッション ほか	指導・助言 岡山大学教育学部 県教育庁指導課 ほか

4 成果と課題

インターンシップを通し、長期的・継続的に学校現場を体験することで、学校がどのような教育課程を実施し、教育によって子どもがどのように成長しているかを実感することができたと言う点で成果は大きい。

「教師への道」研修についても、参加者には非常に好評であり、また、様々な知識や技能だけでなく、教師としての人間性の向上にも大いに役立っている。

ただ、学生と受入学校園の双方において、インターンシップの位置付け等の理解が十分でないこと、「教師への道」研修の参加者数が少ないことが課題として残っており、来年度に向けて課題を解消することができるよう改善すべき点については改善を図りたい。

(1) 教員養成に関する事項

④ 学生による学力向上支援への協力

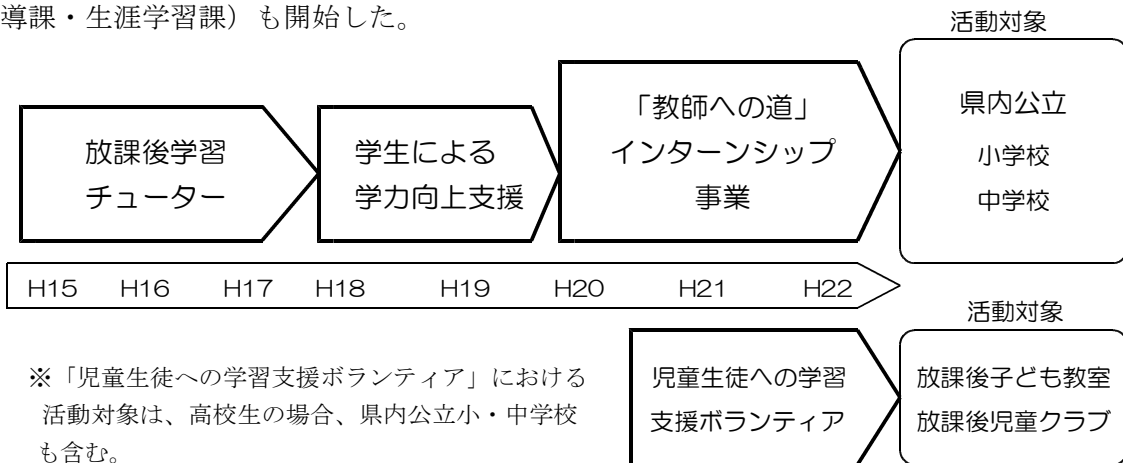
1 経緯

文部科学省は確かな学力の形成のため、放課後の学習相談をはじめとした児童生徒へのきめ細かな指導を一層充実させ、学習上のつまずきの解消や学習意欲の向上を図るとともに、教員志望学生の将来の教員としての資質能力の向上につなげる等の観点から、大学生を「放課後学習チューター」として活用する調査研究を平成15年度から17年度の3年間にわたって実施した。本県においても岡山大学教育学部と岡山県教育委員会が連携し、大学生が「放課後学習チューター」として学校で活動する事業を実施し、一定の成果を得たことから、平成17年度をもって終了した。

しかしながら、学校にとって、確かな学力を育むためには、大学生等による学習支援活動が非常に有用であること、また、教員志望学生にとって、日常的に学校で活動することにより、実践的指導力の基礎を継続的・系統的に身につけることが不可欠であることから、「放課後学習チューター」を単に終了するのではなく、「学生による学力向上支援」（プロジェクト科目「学校教育実践」）として、発展的に継続することとした。

さらに、「学生による学力向上支援」は、平成20年度から新たに実施した「教師への道」インターンシップ事業（県教育庁指導課主管：詳細は、平成21年度の重点事業を参照）に統合し、現在にいたっている。

また、平成20年度の半ばから、「教師への道」インターンシップ事業の対象となっていない放課後子ども教室や放課後児童クラブなどに通う子どもの、学習習慣定着等をねらいとした、大学生及び高校生による「児童生徒への学習支援ボランティア」（県教育庁指導課・生涯学習課）も開始した。



2 目的

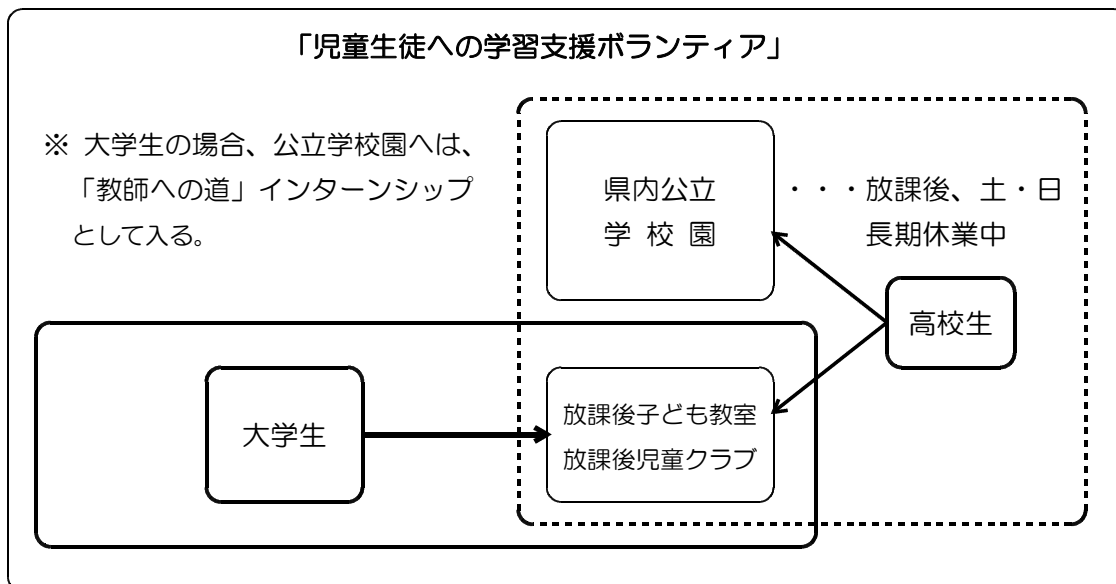
① 「放課後学習チューター」～「学生による学力向上支援」

教職志望学生が、日常的に公立の小・中学校の教科支援活動に取り組むことを通し、主として、国語、社会、算数・数学、英語等の「教科指導力の基礎」を身に付けるとともに、児童生徒の学習習慣の定着を図る。



## ② 大学生・高校生による「児童生徒への学習支援ボランティア」

小・中学校、放課後こども教室や放課後児童クラブでの放課後や土曜日、長期休業中に実施されている補充学習などの補助を通して、児童生徒の学習習慣の定着や、学力向上に資するとともに、児童生徒との触れあいや、学校の教職員や放課後児童クラブ等の支援員とのコミュニケーション、また教えること等の体験を通し、職業適性や将来設計について考えたり、勤労の尊さや喜び等を体得することを目的とする。



<参考>

○ 「教師への道」インターンシップ事業の事業内容

次に示すものを基本とする。

① 授業・保育、学級活動、学校行事等の補助や図書館指導などの業務等

② 放課後や長期休業中における幼児・児童・生徒の学習や生活支援、その他諸活動等

③ 日本語指導が必要な児童・生徒への学習支援等

## 3 プロジェクト科目としての位置付け

「学生による学力向上支援」は、「教師への道」インターンシップ事業に統合された後も、プロジェクト科目（岡山大学教育学部設定科目）に位置付けられており、履修者には専修免許の単位として単位認定されている。

## 4 成果と課題

確かな学力の形成に向けて、学校現場の授業実践を長期的・継続的に体験することで、学校教育における授業研究の大切さを実感した学生が多い。

一方、「教師への道」インターンシップ事業、「児童生徒への学習支援ボランティア」と新たに実施した事業の、実施期間や手続き等の学生への周知が今後の課題である。

## (2) 教員研修に関する事項

### ① 新学習指導要領家庭科授業への提案－中国地区5県の家庭科実践研究を中心として－

本講座は、小・中・高等学校の先生方の家庭科の授業実践に寄与できる内容等の提供を目的として、岡山県教育委員会指導主事津田富代先生のご助言を得て、これまで7年間継続して実施してきた。本年度は、8回目の講座となる。

#### 1. 講座の目的

周知のように、小・中・高等学校の学習指導要領が改訂され、新しい家庭科が示された。今回の講座では、新学習指導要領を踏まえた中国5県での小・中・高等学校、大学での家庭科の授業実践・研究、および住生活に関する講演を、日本家庭科教育学会中国地区会との共催で、岡山県の小・中・高等学校の先生方に聞いて頂くことを目的とした。さらに、参加された中国5県の先生方との交流会を通して、家庭科教育学会が現在推進している「家庭科学習時間増への取り組み」を中心とした情報交換を行った。

#### 2. 実施時期と会場

開講日：平成22年8月21日（土）13：30～16：30

場 所：岡山大学教育学部講義棟 5102室

#### 3. 講座内容

講座全体のタイムテーブルと概要は、以下の通りである。

13:00～ 受付

##### I 研究発表（13:30～14:50）

- |             |   |                         |
|-------------|---|-------------------------|
| 13:30       | 1. 子どもの発達段階をふまえた効果的な食育のあり方<br>鳥取大学  | ○福田 恵子                  |
| 13:45       | 2. 食育活動における学校給食メニュー作りの参加効果<br>総社市立総社北小学校<br>島根大学教育学部                                    | ○森谷佳菜子<br>多々納道子         |
| 14:00       | 3. 岡山県の大学生における栄養素等摂取量<br>岡山大学大学院教育学研究科<br>美作大学短期大学部                                     | ○河田 哲典<br>山田 英明         |
| 14:15～14:20 | 休憩  |                         |
| 14:20       | 4. 「ふりかえり」にみるロールプレイングを用いた授業が児童の自尊感情に与える影響<br>福山市立女子短期大学<br>広島大学附属三原小学校<br>広島大学大学院教育学研究科 | ○正保 正恵<br>林原 慎<br>伊藤 圭子 |
| 14:35       | 5. 家族の健康を中軸とした授業ストーリーの提案－中学校における実践－<br>山口大学附属光中学校<br>山口大学教育学部                           | ○船田 敦子<br>西 敦子          |

## II 講演会 (15:00～16:00)

演題「民家（伝統的住まい）に学ぶ」

講師 岡山大学大学院教育学研究科 教授 富士田亮子先生

## III 交流会 (16:00～16:30)

テーマ「家庭科学習時間増への取り組み」

### 4. 参加者

当日は、岡山県内国公立及び私立の小・中・高等学校及び特別支援学校から40名余りの参加があった。小・中・高等学校の先生方は、様々な研修等があり、大変、忙しい時期ではあるが、岡山市内はもとより、広域から参加があり、今年度も私学の高等学校からの参加者があった。

### 5. 今年度講座の特色と次年度にむけて

今年度は、家庭科教育学会中国地区会と共催で講座を行った。参加された先生からは、普段は聞くことができない他県の家庭科に関する研究や、「民家」に関する講演を聞くことができ、これからの授業づくりの参考になったという感想を頂いた。

また、交流会では、中国5県の様々な校種で家庭科を担当している先生方が、それぞれ悩みながら授業を行っていること、さらに、多くの場合、家庭科担当者は1校に1名であり、自分が抱えている問題を相談する教員がいないことから、今回、同じ立場の教員同士で意見交換ができたことが嬉しく、有意義であったという意見が寄せられた。

交流会の最後には、平成元年以来、小・中・高等学校の家庭科の授業時数が削減される中、次期学習指導要領改訂に向けて、学校教育における家庭科の意義や重要性を示す教育実践の創造と、その推進力となる“全校種にわたる家庭科担当者を結びつけ、悩みや実践を共有し、子どもにとって意味のある授業実践を積み重ねていくことのできるネットワーク”を構築していく必要性が確認された。

本講座に対する要望としては、今年度が土曜日開催であったため、平日の方が参加しやすいこと、また、新学習指導要領で家庭科の改訂の要点となっている「家族」「家庭生活」や「食育」「環境問題」等に関して、この講座で取り上げてほしいという要望が多かった。次年度にむけて、本講座が、岡山県内の学校で家庭科を担当しておられる先生方の日々の授業づくりや、問題等の解決の一助となるように、開講内容を考え、充実した講座となるように努力していきたい。

## (2) 教員研修に関する事項

### ② 中・高等学校美術科の授業づくり

---

#### 1 事業の目的

平成20年3月に中学校学習指導要領が、平成21年3月に高等学校の学習指導要領が公示され、各学校では、新学習指導要領の改訂の趣旨をふまえた授業づくりに向けて様々な取組が行われている。

美術科改善の基本方針では「鑑賞の指導の充実」について、改めて次のように示されている。

- ・ 「よさや美しさを鑑賞する喜びを味わうようにするとともに、感じ取る力や思考する力を一層育てるために、自分の思いを語り合ったり、自分の価値意識を持って批評し合ったりするなど鑑賞の指導を重視する。」
- ・ 「美術文化の継承と創造への関心を高めるために、作品などのよさや美しさを主体的に味わう活動や、我が国の美術や文化に関する指導を一層充実する。」

また、今回の改訂において、形・色・材料などの性質や、それらがもたらす感情を理解したり、対象のイメージをとらえたりするなどの資質や能力が十分育成されるようにするため〔共通事項〕が新設された。

これらを受け、表現と鑑賞を関連づけた授業の工夫・改善を目的に美術科教員が研修を深めていくことは意義深いことであり、岡山県総合教育センターが実施する中・高等学校美術研修講座の参加者が、各学校において効果的な鑑賞の授業が行えるよう、岡山大学教育学部の教員から継続的な支援を行うものとする。

#### 2 事業の内容

##### 平成22年度岡山県総合教育センター美術研修講座5

- ① 目的 岡山県立美術館で開発中の鑑賞教材を活用し、水墨画や日本美術に関して鑑賞と表現を連携させた授業を、演習を通して体感する。
- ② 日時 平成22年8月26日(木) 9:30～16:15
- ③ 場所 岡山大学教育学部 東棟3F1306号室
- ④ テーマ 「表現と鑑賞を関連づけた授業の工夫・改善」～水墨画の魅力～
- ⑤ 講師 岡山大学教育学部美術・工芸科教育 准教授 赤木里香子  
岡山大学教育学部教育社会学 准教授 山口健二
- ⑥ 受講者 中学校 教員 11名  
高等学校 教員 3名
- ⑦ 日程 9:30～10:00 開会・自己紹介  
10:00～15:30 1 講義 「県立美術館の作品による鑑賞の授業  
～水墨の世界を見る・知る・考える～」
  - (1) アート・トラベリング・トランクについて
  - (2) 「なんちゃって若沖なりきり」
  - (3) 雪舟「山水図」と玉潤「廬山図」の鑑賞
  - (4) 武蔵「三幅図」の鑑賞2 演習 「墨による表現と展示の可能性を探ろう」  
15:30～16:00 相互鑑賞, 参加者協議  
16:15 閉会

### 3 講義「県立美術館の作品による鑑賞の授業～水墨の世界を見る・知る・考える～」

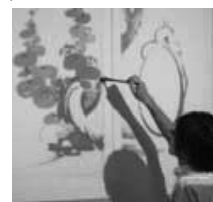
#### (1) アート・トラベリング・トランクについて

岡山県立美術館では、当館の所蔵作品を元に、図工・美術の授業づくりのための素材の入ったボックス(アート・トラベリング・トランク)を作成し、ミュージアム特使として県下の小中学校の教員をハブ教員に任命してその活用を図ろうと企画している。使い方の見本もあるが、使う教員の工夫で様々な授業ができるものを考えている。

#### (2) 「なんちゃって若沖なりきり」～伊藤若沖「花鳥人物図屏風」より～



伊藤若沖の作品「花鳥人物図屏風」を取り上げ、二人組で作品について話し合い、作家になりきり解説しながら描いている様子をパフォーマンスした。話し合いのポイントは、水墨画の鑑賞で大切にしたい3つのB(Body「体」, Brush「息」, Breath「筆」)や描いた順序、勢いなどであった。



#### (3) 雪舟「山水図」と玉潤「廬山図」の鑑賞

折り目正しい写実の北宗画と描くことに意味を見いだす南宗画のいずれもの影響を受けた雪舟の作品制作について研修した。水墨画は、我が国の伝統文化であり、権威や知識、伝統があって続いてきたものである。雪舟の作品を鑑賞する際に大切にしたい3つのSは、身体性、心象性、装飾性である。

#### (4) 武蔵「三幅図」の鑑賞

### 4 演習 「墨による表現と展示の可能性を探ろう」



まずは、筆の勢いや強弱、濃淡や破墨、筋目描きなど水墨画の様々な表現技法をいろいろな和紙で試してみた。次に、武蔵の「三幅図」より鷺の模写に挑戦した。写生か写意かを意識しながら描くことが大切である。



最後に、全員で「対幅」をテーマにした作品の制作を行った。仕上がった作品について制作意図を相互に発表し合い、鑑賞の視点を学ぶことができた。



### 5 次年度への取組

本年度の研修事業では、新学習指導要領で重点化が図られた我が国の美術や文化に関する指導の中から「水墨画」を取り上げ、鑑賞と表現の授業づくりについて、新しい貴重な提案をたくさんいただき、とても充実した研修となった。受講者の満足度も非常に高い研修であり、明日からの授業で活用できる内容のものがたくさんあった。

新学習指導要領実施に向けての移行期間においても、美術の指導に当たっては、可能な限り新学習指導要領での指導に取り組むこととされている。

今後も、新学習指導要領に基づいた新たな分野における表現と鑑賞の指導方法について、本事業で研修を深めていくとともに、高等学校美術科教員への広報にも力を入れ、高等学校における鑑賞教育の充実を図っていきたいと考えている。

### (3) 学校教育上の諸課題への対応に関する事項

#### ① 「子どもほっとライン事業（子ども電話相談）」への多面的な連携協力

##### 1 本事業の概要と位置づけ

###### (1) 経緯と趣旨

岡山県教育庁生涯学習課が実施している「子どもほっとライン」は、平成12年8月よりスタートし、平成13年7月からは、岡山県青少年総合相談センター内に設置している6つの相談窓口の一つとして位置づけられ、同じく生涯学習課が所管する「すこやか育児テレホン」と同じ部屋で活動をしている。

いじめ問題をはじめ、自分の生き方や家族・友人関係で悩む子どもたちが電話とメールにより、気軽に悩みを相談することで、子どもたちのすこやかな成長を促すことを目的に設置している。

###### (2) 電話相談実施内容

###### ① 開設日時：年中無休（年末・年始を除く）

月～金 17:00～23:00（2交替制）

土・日・祝日 8:30～23:00（4交替制）

※ 電子メールによる相談にも対応する。（メールは24時間受付）

###### ② 学生相談員の配置

心理学等を学んでいる大学生・大学院生で、相談員養成講座の修了者

##### 2 教育学部、及び附属教育実践総合相談センター（臨床部門）との連携協力内容

###### (1) 子どもほっとライン事業調査研究委員会への委員依頼（年2回）

委員は、6名（内、岡山大学より教官2名、学生1名）で構成し、相談体制のあり方、相談内容の分析や対応方策等、事例検討会の持ち方、相談員養成講座の企画・立案について指導・助言を得た。

###### (2) 「子どもほっとライン事業相談員養成講座」の講師依頼（計6講座）

新規の学生相談員を養成するため、子どもを取り巻く問題、電話相談の基本やカウンセリング技術等について5日間、12講座を実施した。

###### (3) 事例検討会・スーパーバイス体制の整備

調査研究委員（岡大教官2名）に、学生相談員を対象にした事例検討会におけるスーパーバイザーとして講師を依頼した。（12回のうち、6回を岡大教官が担当）

自殺予告やいじめ、虐待などの相談があった場合の「危機介入」については、毎月の事例検討会や調査研究委員会で検討し、指導指針を明確にしている。学生相談員は相手の情報を整理し、生涯学習課に早急に通報し、その後の対応は生涯学習課が行うようにしている。



(4) 学生に相談員の委嘱 41名 (岡山大学学生 計29名)

連携協力の柱である学生相談員の登録者は、年間を通じ業務にあたった。

◆ 学生相談員のコメント

- ・ 身近な人には相談しにくいという環境にある児童生徒がいるんだということを実感しています。電話相談員として、子どもたち自らが抱えている問題に対して向き合おうとするときに背中を押したり、負担感を減らしたりすることができるのではないかと思います。
- ・ お兄さん、お姉さんの立場で相談者の話を聴くことで、共感的立場が取りやすかったり、アドバイスしやすかったりと思います。相談者が気軽に自分の話をし、少しでも気持ちを楽にすることができるようにこれからもがんばりたいです。
- ・ パソコンやケータイに依存している子ども、周囲の人とのコミュニケーションが希薄な子どもが多いと感じます。「人とつながっている」「自分は一人ではない」と実感させる役割を担っていきたいと思います。

3 相談件数と内容(22年4月～23年1月)

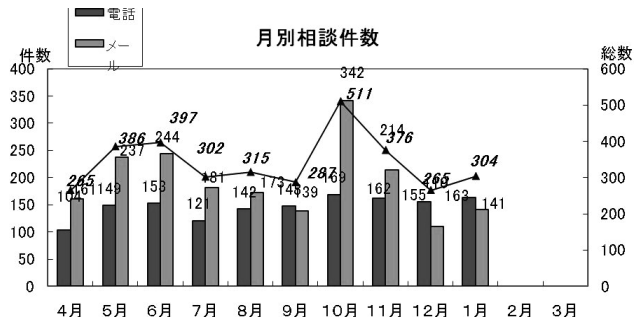
○相談件数 3,408件

電話相談 1,466件

メール相談 1,942件 である。

小学生	520件
中学生	753件
高校生	1753件
その他	56件
不明	326件

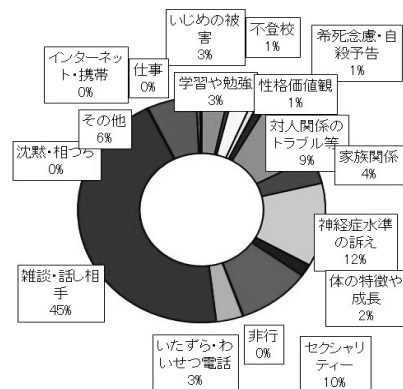
(H22. 4～H23. 1)



○内 容

話し相手を求めている電話やメールが多く、人間関係に悩んだり、ストレスを感じたりして、精神的に不安定になっているという内容の相談が多い。

相談内容の分類 (H22. 4～H23. 1)



4 成果と今後の課題

学生ボランティアが、相談者に近い立場で対応しているため、気軽に相談できる場になっている。

一方、性に関する相談や神経症水準の相談を受けることも増えている。今後も適切に対応できるよう、緊急対応に対しての体制を整えたり、事例検討会や養成講座の充実を図ったりしていく必要がある。

### (3) 学校教育上の諸課題への対応に関する事項

## ② 生きる力応援プラン「夢さがしの旅」推進事業

---

### 1 事業の概要

本事業は、平成13年度文部科学省委託事業「悩みを抱える青少年を対象とした体験活動推進事業」、平成14・15年度県事業として実施した「学社融合子どもの自分さがし支援プログラム開発事業」を踏まえ、平成16年度より、不登校・ひきこもり傾向にある小中学生を対象とした自立支援事業として実施している。

事業内容は、小中学生とその家族を対象として、宿泊を伴う自然体験活動や物づくり、交流活動を展開し、子どもたちのコミュニケーション能力や社会性をはぐくむとともに、参加家族への支援を図るために、親同士が話し合える場の設定やカウンセラーとの個別相談の時間を設定している。

#### (1) 事業の趣旨と内容

教育上配慮を必要とする子ども（不登校傾向の児童生徒や屋内に引きこもり傾向の児童生徒）が、学校や家庭を離れ、自分を見直し、将来の自分を探して学んでいくための目標を見つけることができるように、学校教育・社会教育関係者等が連携し、各社会教育施設の特性を生かした活動を通して、子どもの自立を支援する。

#### (2) 事業内容

##### ① 夢さがしの旅推進委員会の設置（年2回開催）

推進委員会では、プログラムの運用や参加者の募集、学生ボランティアの研修会のあり方、事業の検証等について研究協議を行った。

##### ② 学生ボランティア事前研修会

日時 平成22年8月7日 13:00～16:00

内容 講義：「夢さがしの旅のボランティアについて」

演習：「グループワーク『こんなときはどうする、子どもたちの理解と対応について』」

参加者 31名 岡山大学学生3名

（ノートルダム清心女子大学学生10名 倉敷芸術科学大学8名 川崎医療福祉大学学生1名 広島大学学生3名 山陽学園大学学生1名 吉備国大大学学生1名 中国学園大学学生1名 岡山理科大学1名 社会人2名）

##### ③ 事業の実際

○「であい・チャレンジ」の旅（岡山市立少年自然の家）

**5月28日（金）～ 5月30日（日）**

内容：パターゴルフ、トンボ玉 等

参加者：17名（対象小学生2名 中学生11名 保護者4名）

学生ボランティア：13名（岡山大学学生11名）

**12月3日（金）～12月5日（日）**

内容：ニュースポーツ、苔玉づくり 等

参加者：23名（対象小学生10名 中学生5名 保護者6名 兄弟等2名）

学生ボランティア：16名（岡山大学学生6名）

○夢さがしの旅 IN 矢掛町（夢さがしの旅実行委員会 矢掛町）

**7月10日（土）～7月11日（日）**

・内容：カヌー教室、陶芸教室 等



- ・参加者:17名(対象小学生4名 中学生6名 保護者6名 兄弟等1名)
- ・学生ボランティア:5名

**10月9日(土)~10月10日(日)**

- ・内容:料理教室、果物狩り 等
- ・参加者:18名(対象小学生6名 中学生5名 保護者6名 兄弟等1名)
- ・学生ボランティア:15名(岡山大学学生 1名)

**2月12日(土)~2月13日(日)**

- ・内容:餅つき、スキー 等
- ・参加者: 15名(対象小学生5名 中学生4名 保護者4名 兄弟等2名)
- ・学生ボランティア: 4名(岡山大学学生 2名)

○さわやかデー由加山の旅(倉敷市少年自然の家)

**5月9日(日)**

- ・内容:野外ゲーム、春のハイキング 等
- ・参加者: 21名(対象小学生8名 中学生4名 保護者9名)
- ・学生ボランティア:11名(岡山大学学生 2名)

**1月29日(土)~ 1月30日(日)**

- ・内容:由加山ぞく鍋、餅つき、冬の星座観察 等
- ・参加者:19名(対象小学生5名 中学生5名 保護者9名)
- ・学生ボランティア:10名

○山と海の楽しい旅(倉敷市少年自然の家&渋川青年の家)

**9月18日(土)~ 9月19日(日):倉敷市少年自然の家**

- ・内容:飯ごう炊飯、そうめん流し、水鉄砲づくり 等
- ・参加者: 29名(対象小学生9名 中学生8名 保護者12名)
- ・学生ボランティア:23名(岡山大学学生 3名)

**9月19日(日)~ 9月20日(月):渋川青年の家**

- ・内容:バーベキュー、海遊び 等
- ・参加者: 29名(対象小学生6名 中学生10名 保護者13名 兄弟等2名)
- ・学生ボランティア:23名(岡山大学学生 3名)

○和と輪でつなぐ海の旅(渋川青年の家)

**12月17日(金)~ 12月19日(日)**

- ・内容:海遊び、シルバークラフト 等
- ・参加者:29名(対象小学生4名 中学生14名 保護者10名 兄弟等1名)
- ・学生ボランティア:15名(岡山大学学生 2名)

○和と輪でつなぐ山の旅(青少年教育センター閑谷学校)

**10月1日(金)~ 10月3日(日)**

- ・内容:ナイトアドベンチャー、ふれあい遠足 等
- ・参加者:24名(対象小学生6名 中学生9名 保護者9名)
- ・学生ボランティア:18名(岡山大学学生 5名)

**2月18日(金)~2月20日(日)**

- ・内容:B級グルメフェア、思い出交歓会 等

・参加者:33名(対象小学生7名 中学生10名 保護者14名 兄弟等2名)

・学生ボランティア:20名(岡山大学学生 1名)

### 参加した学生ボランティアの感想

- ・今回初めて参加しました。私自身とても緊張して臨みましたが、思った以上に子どもたちはパワフルで行動範囲も広く、これまでにない学びの場となりました。子どもたちの瞳がきらきらと輝き、本当に楽しそうにしている姿を見るとこちらまで元気をもらえたように思います。温かく見守ることや、よいところを見つけて伝えることで、子どもたちは成長するんだということが分かりました。
- ・何度か夢さがしの旅のボランティアとして参加していますが、いろいろな子どもがいて「みんなちがってみんないい」ということを実感することができています。1対1で接することでその子のよいところを見付けることができ、3日間でたくさんの気付きがありました。また、スタッフ同士で協力したり、励まし合ったりして楽しい時間を過ごすことができました。

## 2 成果と今後の課題

本事業では、大学生を中心とするボランティア(活動支援スタッフ)の存在がとても大きく、活動支援スタッフは常に参加者と活動を共にし、寄り添い、心の支えや活動の支えになっている。子どもも活動支援スタッフとのつながりを求めているとともに、保護者も活動支援スタッフと子どもとの関わりを大変喜んでいる。

子どもたちがこの旅に継続的に参加することで、普段は不登校であったり、引きこもり気味であったりする子どもが、学校や家庭を離れて生き生きと活動ができている。また、活動支援スタッフや指導スタッフ、参加者同士の交流の中で、相互に会話が弾むなど、積極的な自己表現や安心感が生まれ、回数を重ねるごとに落ち着いて生活することが可能となっている。

夢さがしの旅の参加経験者で、高校生年代(本事業の対象外)になった生徒が、ジュニアリーダーとして活躍している。彼らは、自らの経験をもとに活動の支援を強く希望し事業に参加しており、活動支援スタッフや指導スタッフの補助的な役割を担っている。彼らの自立した成長ぶりや活躍は、参加者(保護者を含む)にとって大きな目標の一つとなっている。

保護者は、保護者交流会に参加して情報を共有したり、カウンセラーと個別の相談をしたりすることで、子どもの成長を客観的に考えることができるようになってきている。また、保護者同士のネットワークが生まれ、自主的な集まりや活動が行われている。保護者自身の心のゆとりは、子どもたちの自立に向けた成長に、よい影響を与えたと考えられる。

参加者に発達障害のある子どもが増えており、その対応がまだ十分といえない。今後、特別支援教育課や総合教育センターともさらに連携を図り、専門的な立場からの助言を得て、支援の体制を整えていく必要がある。また青年層の自立支援を行っている団体なども連携して、子どもたちの将来を見据えた取り組みが必要である。

今後もこの旅の良さを生かしながら関係機関等と連携し、参加者にとってよりよい居場所となるようにしていきたい。



渋川青年の家(12/17~19)での海遊びの様子

(3) 学校教育上の諸課題への対応に関する事項

③ 教職員のメンタルヘルス対策

1 事業の目的

近年、精神疾患による休職者が増加傾向にある。また、日常的にストレスを抱えている教職員や不調を感じながらも相談できずにいる教職員も多いと思われる。さらに、職場のメンタルヘルスを維持し、向上させる役割を持つ管理職対象の相談窓口もまだ少ない。

そこで、これら教職員や管理職を支援するために、「教職員サポート相談」「管理職サポート相談」（平成21年度より「管理職メンタルヘルス相談」を改称）の二つの相談窓口を平成15年度に設置し、現在に至っている。今年度は、教職員への更なる周知が大切であると考え、従来のチラシの配付等に加え、教職員の福利広報紙での紹介、名刺サイズのカードの配付等を行い、利用促進を図った。

2 事業の内容

(1) 教職員サポート相談

一般教職員を対象に、面接相談を実施している。面接相談では、相談者のニーズに応じて、カウンセリング又はコンサルテーションを行っている。平成22年度は平成21年度に比べ、相談件数が大きく増えている。これは教職員に徐々に周知され、教育現場で悩む教職員の駆け込み寺的な窓口として、利用されているものと思われる。

(相談実績)

(件)

年 度		H21		H22(H23.1.31現在)	
実相談件数		32		54	
延べ相談件数		41		67	
相談種別	カウンセリング	20	62.5%	54	100.0%
	コンサルテーション	12	37.5%	0	34.6%
性別	男性	20	62.5%	41	75.9%
	女性	12	37.5%	13	24.1%
校種別	幼稚園	0	0.0%	0	0.0%
	小学校	15	46.9%	15	27.8%
	中学校	17	53.1%	22	40.7%
	高等学校	0	0.0%	0	0.0%
	特別支援学校	0	0.0%	17	31.5%
	その他	0	0.0%	0	0.0%

(2) 管理職サポート相談

管理職を対象に、職場の人間関係や部下職員のメンタルヘルス等について、カウンセリングやコンサルテーションを行っている。平成22年度は平成21年度に比較して、相談件数はやや減少しているが、教育現場の現状や管理職の立場を考慮した相談窓口として利用者の評価も高い。

(相談実績)

(件)

年 度	件数	H21			H22(H23.1.31現在)			
		相談内容			件数	相談内容		
		職場の人間関係	部下のメンタルヘルス	その他		職場の人間関係	部下のメンタルヘルス	その他
延べ相談件数	11	0	8	3	6	2	4	0
小学校	2	0	0	2	4	2	2	0
中学校	7	0	6	1	0	0	0	0
高等学校	2	0	2	0	0	0	0	0
特別支援学校	0	0	0	0	2	0	2	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0

その他：保護者・地域対応、生徒指導上の対応

(3) 学校教育上の諸課題への対応に関する事項

④ 大学、大学院での教員養成カリキュラムの改善

1 デマンド・サイドの視点立つ教員養成カリキュラムの改善

「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)、平成18年7月中央教育審議会には

これからの社会や学校教育の姿を展望しつつ、教員を取り巻く現状等を考慮すると、現在、員に最も求められていることは、広く国民や社会から尊敬と信頼を得られるような存在となることである。このためには、養成、採用、現職研修等の各段階における改革を総合的に進めることが必要であるが、とりわけ教員養成・免許制度の改革は、他の改革の出発点に位置付けられるものであり、重要である。

と、教員養成・免許制度の改革の基本的な考え方が示されている。そして、教員養成・免許制度の具体的な方策として、以下の3つが強調されている。

①教職課程の質的水準の向上

②「教職大学院」制度の創設－教職課程改善のモデルとしての教員養成教育－

③教員免許更新制の導入－恒常的に変化する教員として必要な資質能力の確実な保証－  
養成段階を通して、「教員として最小限必要な資質能力」を確実に身につけることのできる教職課程の改善・充実が不可欠である。質の高い教員養成教育が行うためには、教員養成コア・カリキュラムの改訂は大きな意義がある。岡山大学では、新科目「教職実践演習(仮称)」の新設を期に教員養成コア・カリキュラムを改訂し、そのモデルカリキュラムの開発研究を行い、教育内容・方法の開発研究や、実践性の高い優れた取組の支援を行うことにした。改訂に当たっては、特に、保護者や学校現場、地域、教育行政など、養成された教員を受け入れる側(デマンド・サイド)の視点立つ教員養成コア・カリキュラムの改訂に取り組んだ。

教員養成コア・カリキュラムの履修モデル(中学校教育コース)

学年	1年		2年		3年		4年			
期	教職への意欲向上期	教育実践理解期	基礎的教育実践力養成期		発展的教育実践力養成期		採用前研修期			
授業科目	学習指導力		各教科の指導法			教科の指導法開発	教職実践演習 卒業研究			
			教科内容概論	教科内容論、各論		教科の内容開発				
				カリキュラム論						
				教育の方法と技術		【教育メディアの活用等】				
	生徒指導力	学校と教育の歴史 学校教育心理学		【現代教育方法学 学習意欲向上の原理と方法 教育評価・測定】						
				【教育哲学・日本教育史・西洋教育史】					【教育相談論A 進路指導論 生徒指導論II AJ】	
			発達心理学A 発達心理学B 発達心理学C	生徒指導論I 特別活動論						
						道徳教育論 発達障害教育概論				
	コーディネータ	教育の制度と社会	【教育社会学・教育法制論・ 生涯学習社会論・教育経営学】							
	マネジメント力	教職論			教職とマネジメント					
実践的指導力	所属学校外	フィールド・チャレンジ(学校支援ボランティア等体験活動)								
	所属学校	教育実習Ⅰ(観察・参加)	教育実習Ⅰ(観察・参加)		教育実習Ⅱ(中学校教育実)	教育実習Ⅲ(附属中学校実)	教職実践インターンシップ			

注:【 】は選択必修科目

注: 教育実習Ⅲ後の開講

## 2 教員養成コア・カリキュラムの改訂と履修モデル

前ページに示した教員養成コア・カリキュラムの履修モデルは、改訂バージョンである。岡山大学の教員養成コア・カリキュラム改訂プロジェクト委員会が平成 21 年度に実践的指導力を核にして、デマンドサイトの視点に立って改訂し、策定した履修モデルである。

特徴は、横軸に 5 段階の教師力量形成期（「教職への意欲向上期」「教職実践理解期」「基礎的教育実践力養成期」「発展的教育実践力養成期」「採用前研修期」）を取り、縦軸に教師に必要な資質・能力（「学習指導力」「生徒指導力」「コーディネート力」「マネジメント力」）を取って、そのマトリックスで教員養成コア・カリキュラムの履修モデルを構成している。すなわち、教師力量形成期の各期に習得すべき教員として必要な資質・能力を育成する科目を配置し、各科目の履修等を通して、学生が理論と実践を往還しながら主体的、効果的に必要な資質・能力を統合・形成していくことができるようにした履修モデルである。

また、実践的指導力については、積み上げ方式で、「教職への意欲向上期」「教職実践理解期」「基礎的教育実践力養成期」等の各期に相応しい教育実習及びフィールドチャレンジを配列し、4 年次での「発展的教育実践力養成期」「採用前研修期」における「教職実践インターナシップ」「教職実践演習」へ深化・発展し、教職実践力の質保証を担保できる履修モデルを策定している。

## 3 教職課程に係る事後評価機能の充実

養成段階の DP として、教員として理論と実践が有機的に統合され、形成された資質・能力を持った役に立つ教員を学校現場に輩出する使命・責任がある。そこで、養成段階から教育実習においても、デマンド・サイドの視点に立ち、教員を志す学生が使命感や責任感、教育的愛情等を持って教育実習に取り組みることが不可欠である。そこで、各期における教育実習の履修に当たっては、履修に際して満たすべき到達目標を明確に示し、それに基づき、学生が教員に必要な「学習指導力」等の 4 つの資質能力の形成度を教職実践ポートフォリオで自己評価して確認させている。すなわち、教員になる上で、この期の自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している 4 つの資質・能力に関係する知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、よりよく教師力量形成を発達させるようにする必要がある。

1 年次から積み上げ方式で教育実習の充実を図っているのは、学部での理論研究の学びを教育実習で活用し、教育実習で見いだした様々な課題を大学に帰って実践研究し、次の実習のステップにおいて大学で学んだ理論を教育実践に生かす。こうしたサイクリックな理論と実践の往還により、教職を目指す学生は確かな学校臨床知を形成する。教師力量を客観的に深化・発展させるためには教職実践ポートフォリオは不可欠であり、教職課程に係る事後評価機能の充実を図るためにも必要である。

なお教職実践ポートフォリオにある評価規準の項目も平成 21 年度に改訂したが、これについてもデマンド・サイドの視点に立って信頼性を高めるよう改善・充実を図る必要がある。

### (3) 学校教育上の諸課題への対応に関する事項

#### ⑤ 高等学校における発達障害支援推進事業

---

##### 1 本事業の目的

本県の高等学校においては、すべての公立高等学校で校内委員会の設置や特別支援教育コーディネーターの指名が行われている。しかしながら、小・中学校に比べると、校内支援体制の整備及び発達障害等のある生徒に対する支援が遅れていると言わざるを得ない状況もあり、特別支援教育や発達障害に関する教員の理解・啓発や、既存の組織の活用などによる各学校の実情に応じた機能しやすい支援体制づくりが課題となっている。

高等学校ではこれまでも、主として生徒指導や教育相談等の観点から、発達障害のある生徒も含めて生徒への指導・支援が行われてきた。しかし、生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、それに対応した適切な指導及び必要な支援を行うためには、課題が多いと考えられる。特に発達障害のある生徒への指導・支援については、校内体制の整備をはじめ、授業を等の教育活動の工夫等について、一層の取組が必要である。

そこで、県立高等学校における特別支援教育の推進を図るため、年間10校程度を推進校に指定し、ミドルリーダーを対象に、発達障害の理解と支援に関する研修等を実施するとともに、特別支援教育コーディネーターとミドルリーダーとが連携し、外部専門家の協力を得て、生徒の学習や生活面での教育的支援を行うなどの実践を通じて、校内支援体制を整備し、発達障害支援の在り方に関する今後の検討に資するため、本事業を実施した。

##### 2 事業の内容

###### (1) 発達障害支援連絡協議会の開催

特別支援教育コーディネーターやミドルリーダーの参加による発達障害支援連絡協議会を年2回開催し、各校での実践事例の報告等をもとに、大学教員等の専門家による特別支援教育推進に関する指導・助言等を通して、発達障害等のある生徒に関して必要な協議をする機会とする。

###### (2) 特別支援学校等での研修

ミドルリーダーに特別支援学校等での研修の機会を設定し、一人一人の生徒に応じた支援内容や指導方法等について、実践的な研修をする。

###### (3) 外部専門家との連携

推進校においては、特別支援教育コーディネーターを中心として、大学教員、医師、臨床心理士等の専門家と連携し、ケース会議や校内研修等を行う。ミドルリーダーは、特別支援教育コーディネーターと連携して、特別な支援を必要とする生徒への適切な指導・支援を行うために、学校内外の人的資源や物的資源等を効果的に活かしながら、校内委員会をはじめとした校内支援体



〔発達障害支援連絡協議会〕

制の整備に取り組む。

### 3 成果と今後の課題

本事業は平成20年度に12校、平成21年度に11校、そして平成22年度にも11校の県立高等学校を推進校に指定し実施した。特別支援教育コーディネーター及びミドルリーダーによる発達障害支援連絡協議会を中心として情報交換を行ったり、専門家からの講義を受けたりすることにより各校での取組が進んできている。

#### ○専門家との連携

医療、福祉、教育などそれぞれの専門的な分野での研究、臨床経験が豊富な専門家を、校内の職員研修会や支援の必要な生徒一人一人に関するケース会などに招いて職員の理解啓発を図っている。また、職員だけでなく生徒に対する理解啓発のための研修会や支援の必要な生徒や保護者のための教育相談に専門家を活用し、アドバイスを求める取組も進んできている。

#### ○特別支援学校や関係機関との連携

「個別の教育支援計画」の作成や活用への助言、職員研修会の講師、個々のケースについての継続的な相談等、必要に応じて特別支援学校との連携が行われている。また、適切な支援を行うために、個人情報に配慮した上で、高等学校入学までの有効な支援を引き継ぐ必要性が高まっている。中学校や地域の関係機関、医療機関等との連携を図るため、県教育委員会の作成したパンフレットに例として掲載した「個別の教育支援計画」を参考にしたり、学校独自の書式を作成したりして、ツールとして活用するなどの積極的な取組をしている高等学校もある。

このように着実に成果を上げている本事業であるが、岡山大学との連携協力については、前出の「専門家との連携」において、岡山大学教育学部教員を各校での研修などの専門家や、発達障害支援連絡協議会の講師として招き、より良い支援に活かしていくなどの取組が始まっている。今後どの部分でどのような効果的な連携を行うことができるかも含めて課題とし、取組を進めていきたい。

平成20年度	平成21年度	平成22年
岡山芳泉高等学校	岡山大安寺高等学校	岡山朝日高等学校
高松農業高等学校	倉敷天城高等学校	岡山操山高等学校
東岡山工業高等学校	玉島高等学校	西大寺高等学校
岡山御津高等学校	倉敷鷺羽高等学校	興陽高等学校
倉敷中央高等学校	津山東高等学校	瀬戸南高等学校
玉野高等学校	高梁城南高等学校	岡山工業高等学校
笠岡商業高等学校	新見高等学校	倉敷青陵高等学校
落合高等学校	備前緑陽高等学校	倉敷商業高等学校
和気閑谷高等学校	邑久高等学校	津山工業高等学校
矢掛高等学校	久世高等学校	笠岡高等学校
勝間田高等学校	林野高等学校	鴨方高等学校
烏城高等学校		

〔事業推進校〕

#### (4)その他、両者が必要と認める事項

### ① 附属学校園を活用した研修講座の開催

#### 1 本事業の目的と概要

岡山県総合教育センターでは、岡山県の教育の充実と発展のため、本県教育の基本方針に沿って、社会の変化や学校等の要請を踏まえ、関係機関等との連携のもと、学校教育を総合的に支援することに努めている。

活力ある学校を目指し、児童生徒の確かな学びとたくましく豊かな心を育てるために、次のような運営方針を立て、様々な事業を行っている。

五つの行動目標 (岡山県総合教育センター 要覧より)	
○届けます	Web ページや「羅針盤」などで、最新情報や研修成果を届けます。
○出かけます	サポートキャラバンやサテライト講座などで、各地域の学校や研修会に出かけます。
○支援します	カリキュラムサポートや自主研修所などで、先生方の研究・研修を支援します。
○提案します	研修講座やリーフレット、教育研究発表大会などで研究成果や実践事例を紹介します。
○磨きます	当センターの所員は、専門性の向上・人間性の向上に向け、絶えず切磋琢磨します。

岡山県総合教育センターの事業の中で、研修講座は重要な柱の一つである。経験年数別研修、職能研修、教科領域別研修、課題別等研修を実施しているが、近年の教育課題の多様化に対応した研修講座となるよう工夫することが求められている。外部施設を活用した一部の研修講座を除き、多くの研修講座はセンターの施設で実施している。そのため、実際の授業参観や授業に基づいた協議などのニーズに対応するために、連携協力事業の一つとして、附属学校園を活用した研修講座を行っている。

#### 2 平成 22 年度に実施した研修講座

今年度は、岡山大学教育学部附属幼稚園、附属中学校の御理解と御協力により、次の研修講座を実施することができた。

##### ◎ 岡大教育学部附属校園で実施した研修講座

施設名	実施期日	研修講座名	参加人数	担当	主な内容
附属幼稚園	7月2日(金)	新規採用教員研修講座	48	御藤	保育参観
附属中学校	8月6日(金)	中学校技術・家庭研修講座(技術)5	14	正好	栽培実習 講義

##### 新規採用教員研修講座

午前に授業参観をした後、午後からは附属幼稚園の先生方と「指導内容と指導上の諸問題」について協議を行った。受講者は実際の教育現場での研修講座を高く評価し、「同じ水遊びでも、それぞれの年齢の幼児に遊べる場があり、発達に合った用具も準備されていて、3年間を見通した



計画をされていることが理解できました。」「保育室の環境構成，教師の援助を中心に見させていただき，自分自身の保育の反省点を多く見つけることができました。環境の大切さを改めて感じるとともに，教師の温かいかわりによって，幼児との関係は築かれていくのだと気付かされました。」「附属幼稚園の先生方と保育参観をして感じたことや日頃の保育の疑問点について話し合うことができました。自分の保育にどう生かすかを考えることができました。」などの感想を述べている。



保育参観や協議の様子

#### 中学校技術・家庭研修講座（技術）

午前は「子どもたちのやる気を引き出す栽培指導」と題して，静岡県浜松市立天竜中学校教諭竹村 久生 先生のご講義の後，圃場を使った栽培実習を行った。午後は，圃場がない場合の栽培実習を行い，これからの「生物育成」の指導の在り方について協議した。新学習指導要領では「生物育成」が必修となったため，経験がない教師は題材探し，指導の在り方等について必死に模索している。今回の参加者も，大変熱心に取り組んでいた。



栽培実習の様子

### 3 成果と課題

今日的な教育課題の一つに教職員の資質能力の向上が挙げられる。その中でも「授業力の向上」はその中核をなすものである。「授業力」を高めるには，実際の授業を基にした授業研究が最も効果的であり，授業の在り方や具体的な指導方法に関する実践的な検討を行うことが大切である。先進的な教育研究を実践されている附属校園での保育や授業の参観をすることや実際の学校現場の施設・設備を活用しての研修を行うことは，研修講座で学んだことを実践に結び付ける上でも有効な方法である。附属校園とは研究会の助言者として担当主事が招かれるなどつながりがもたれている。今後は現在実施されている校種・教科以外についても協力・連携を進めていきたい。

(4)その他、両者が必要と認める事項

② 県生涯学習大学（のびのびキャンパス岡山）「大学院コース」講座の開設

1 経 緯

岡山県生涯学習センターでは、平成9年度から、県民が自分に適した学習内容を選択できるよう、県等が開設している多様な学習講座を体系化し、学習機会を提供する岡山県生涯学習大学（愛称：のびのびキャンパス岡山）を開設している。

のびのびキャンパス岡山は、県生涯学習センターが開設する高等教育機関等の本県の恵まれた学習資源を活用した専門領域の講座である「主催講座」と、県・市町村・大学・民間団体等が広く県民を対象に実施している講座からなる「連携講座」に分かれ、さらに「主催講座」は、「実践コース」、「専門教養コース」、「大学院コース」の3つに分かれている。

その中で「大学院コース」は、学習成果の積み重ねを地域での指導やボランティア活動に生かすことを目指した指導者育成講座として5講座を開講している。本年度、岡山大学では「歴史と文化」講座を実施した。

2 講 座 名 岡山から考える

3 内 容

月 日 (曜)	10:00 ~ 12:00	13:00 ~ 15:00
8月21日(土)	「岡山の歴史と文化」を見る眼 文学部教授 久野 修義	5世紀の吉備と東アジア 文学部教授 松木 武彦
8月22日(日)	中国人留学生の見た日本 文学部教授 新村 容子	絵図に見る岡山 文学部教授 倉地 克直
8月28日(土)	岡山平野の歴史と文化 埋蔵文化財調査研究センター 教授 山本 悦世 他	岡山平野の歴史と文化 埋蔵文化財調査研究センター 教授 山本 悦世 他
8月29日(日)	岡山平野の歴史と文化 埋蔵文化財調査研究センター 教授 山本 悦世 他	岡山平野の歴史と文化 埋蔵文化財調査研究センター 教授 山本 悦世 他
9月 4日(土)	岡山のキリスト教と美術 文学部准教授 鐸木 道剛	地獄と極楽—『地獄草子絵巻』安 住院伝来本と類本を中心に 文学部准教授 須賀 みほ
9月 5日(日)	社会問題と宗教信仰の間で—石井 十次、留岡幸助、窪田静太郎小論 文学部教授 姜 克實	吉備の古代史 文学部准教授 今津 勝紀
9月11日(土)	内田百閒の随筆について 文学部教授 金関 猛	岡山からロシアの歴史を考える 文学部准教授 吉田 浩
9月12日(日)	岡山藤樹学派 文学部教授 高橋 文博	

#### 4 参加者 34人（男24人、女10人）

	30代	40代	50代	60代	70代	80代	地域別受講者数
男	0	0	2	10	11	1	岡山市15、倉敷市6、 総社市1、高梁市1、早島町1
女	0	1	5	4	0	0	岡山市6、倉敷市2、玉野市1、 赤磐市1

#### 5 参加者の感想

- ・今回の「岡山から考える」という講座は、岡山に居住する者にとって、とても興味、関心の深い内容でよかったと感じています。講座を終えて、自分の居住する地域について、まとめることに挑戦しています。こうした学習の動機を得た講座だったと感じています。（60歳代女性）
- ・今回の学習を終え、岡山県下の歴史をさらに理解したいと感じました。そのため、人・物・情報を大学院のゼミと同様に、さらに一段と掘り下げた講座を開講して欲しいと感じました。（60歳代男性）
- ・今回の講座は、他分野にわたり大変興味深い内容でした。今回の学習の成果を今後の活動（ボランティア）に役立てていきたいと思います。（60歳代女性）

#### 6 事業の成果

（講座を担当した講師による感想から）

岡山大学文学部の歴史系スタッフが中心となり、岡山地域の歴史や文化について、多彩なかたちで受講生に調査研究の成果を紹介し、岡山における「学び」の醍醐味を再確認していただけたと感じている。

アンケート結果からも受講生の本講座に対する評価、満足度が大変高いことがうかがえた。講座の内容も「大学院」としてのレベルで受講生の期待に充分応えたものであったと考えている。

#### 7 今後の課題

本講座は、事前段階から評判が大変高く、申込開始と同時に定員の20人に達してしまっただけで、急遽定員を35人に増員して対応し、最終的には受講者を抽選により決定することとなった。配布している岡山県生涯学習大学の受講案内パンフレットに、対応についてもう少し丁寧な記載をしておけば、受講生にとっても親切だったのではないかと考えている。

内容的には、非常に満足度の高い講座だったので、本講座で学んだ方々が地域でその知識を発揮できる場を提供していただくことが今後の課題である。



## 2 平成22年度の連携重点事業

### (1) 「教師への道」インターンシップ事業

---

#### 1 重点事業にした理由

教育職員養成審議会「養成と採用・研修との連携の円滑化について（第3次答申）」（平成11年12月）で、養成に関する大学と教育委員会との連携について、次のことが示された。

○ 学校における教員希望の学生の受け入れ体制の整備

教育実習・養護実習等大学のカリキュラムを実施したり、教員を希望する学生が日常的に学校現場を体験できるような学校の受け入れ体制を整備することについて、拠点校を相当数設けるなどの方策も含めて、都道府県段階等で検討することが必要である。

○ 採用内定者の受け入れ体制の整備

採用が内定した者に対して採用前に学校現場を体験できるような受け入れ体制を整備することを都道府県段階で検討する必要がある。

複雑化する現在の教育現場において、この答申の重要性についてはますます増しているものと考えられる。

教職を希望する学生が、採用当初から学級担任や教科担任として、支障なく教科指導や生徒指導ができる実践的な指導力の基礎を身につけるために、学校現場で継続的、長期的に教育実践する必要性がますます増していることから、本事業のさらなる充実を図ることを目的に重点事業とした。

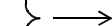
#### 2 連携協力事業のこれまでの経緯

① 日本語教育の必要な外国籍児童生徒への  
学生ボランティアによる教科学習支援  
(連携協力事業として平成12年度から実施)  
(単位認定科目：「日本語教育支援」)

② 学生による学力向上支援  
(連携協力事業として平成18年度から実施)  
(単位認定科目：「学校教育実践」)

③ 学校教員インターンシップ事業  
(連携協力事業として平成13年度から実施)  
(単位認定科目：「学校教員インターンシップ」)

発展的統合



「教師への道」  
インターンシップ事業  
(連携協力事業として  
平成20年度から実施)

### 3 目標

大学、大学院及び短期大学に在学する学生が、岡山県内の公立の幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校でのインターンシップ又はボランティアの活動を通じて、教職への適性を確認し、多様化及び複雑化する学校教育への理解を深め、実践的指導力の基礎を身につけることを目的とする。

### 4 内容

実施する内容については、次に示すものを基本とし、活動期間等と同様、学生と学校園とが協議し決定する。

- ① 授業・保育、学級活動、学校行事等の補助や図書館指導などの業務等
- ② 放課後や長期休業中における幼児・児童・生徒の学習や生活支援、その他諸活動等
- ③ 日本語指導が必要な児童・生徒への学習支援等

### 5 実施状況

- ・受入の対象は、県内の公立学校園。
- ・学生の契約状況（平成22年度は集計中）

<平成20年度>

合計126名（11大学・短大）  
うち、岡山大学教育学部は53名

<平成21年度>

合計164名（9大学・短大）  
うち、岡山大学教育学部は79名

### 6 学生の声（「教師への道」研修）アンケートより）

- インターンシップで得るものは多く、絶対に参加する価値があります。実践の中で、大学で学んだ理論について、具体的にどのようにすればよいのかを体感することができ、そのことによって自信をもって児童と接することができるようになりました。
- 子どもたちの視点ではなく、子どもたちの将来の視点に立って、今必要な支援を行うこと、先を見通した教育が大切なことを学んだ。また、連携して行う教育のすばらしさに感動した。
- インターンシップを通して、なりたい教師像への方法や課題や経験すべきことがだんだん見えてきた。
- インターンシップに参加することにおいても、児童に関わっていくことについても、「自分から」積極的に行動することが大事。自分から勇気を出して動き出さないと、道は開けない！

### 7 成果と課題

参加した学生の様子を見ると、確実な手応えを感じることができたが、インターンシップやボランティアについての、大学、市町村教育委員会、学校園等への事業の周知及び趣旨の徹底がまだ十分ではない。また、「教師への道」研修については、参加者が少なく、開催時期や周知方法等、まだまだ研究する余地が残されている。

今後、関係諸機関と協力をしながら、よりよい方向へと発展させていきたい。

## (1) 教員養成に関する事項

- ① 岡山市の教育施設における学校支援ボランティア事業
- ② 大学企画講座における岡山市立学校長等の講演
- ③ 大学と学校現場との連携に関わる調査研究

## (2) 教員研修に関する事項

- ① 学力・授業力アップ支援事業
- ② 授業で変わる！いきいき岡山っ子育成事業
- ③ 教職員への指導・助言

## (3) 学校教育上の諸課題への対応に関する事項

- ① その他のボランティア制度



## (1) 教員養成に関する事項

### ① 岡山市の教育施設における学校支援ボランティア事業

#### 1 制度の概要

岡山市立幼稚園・小学校・中学校・高等学校での教育活動に、予め登録した地域の方や保護者、学生のさまざまな特技や趣味などを生かし、学校園からの依頼に基づき学校教育を支援していただく制度。開かれた学校づくりの一環として平成14年度から制度を運用。

#### 2 これまでの経緯

- ・平成14年度 学校支援ボランティア制度の運用開始
- ・平成15年度 連携により、大学単位での登録を開始  
大学担当者によるボランティア募集、登録事務等を開始  
学生シンポジウムを開始（会場：教育学部講義棟）
- ・平成17年度～登録時に研修受講を義務づけ、年度当初に大学を会場に研修会を実施

#### 3 内容

次の各分野で、学校園からの依頼や学生の希望をもとに、活動時間、活動内容等を学生と学校園とが相談し、活動する。

- ①教育活動支援・・・授業補助、保育の補助、特別に支援を要する子どもの支援、個別指導、学校行事の補助、部活動の支援、保健室の支援、給食の指導補助 等
- ②環境整備支援・・・図書室の蔵書整理、教材・教具の作成、掲示物の作成 等
- ③学校安全支援・・・登下校時の付き添い、通学指導 等

#### 4 登録者数の推移・活動割合

年 度	H 1 4	H 1 5	H 1 6	H 1 7	H 1 8	H 1 9	H 2 0	H 2 1	H 2 2
登録者数	—	1 3 4	1 8 3	1 6 3	2 7 0	2 6 6	3 1 8	4 3 0	5 1 1

※H22は1月末

平成22年度活動割合 50.5%（アンケート回収率 41.5%）

〈※参考：平成21年度活動割合 61.6%（アンケート回収率 50.4%）〉

#### 5 成果と課題

教職を目指す学生にとっては、学校現場の日常を体験するよい機会となっている。また長期的に活動することで、学校園や子どもの実態・変化をより知ることができ、指導方法や支援の仕方、子どもとのかかわり方を多く学べる場となっている。学校園にとっても、専門知識のある学生の活動は、依頼も多く、有意義な活動になっている。

近年、大学においてボランティア活動に関する相談体制が充実することにより、より多くの学生が登録し、活動を実施している個々の学生の目的意識は高い。

今後は、大学の単位認定との関係や県や他のボランティア活動との整理、学生の活動実態の把握、市周辺部の学校園での活動促進などを行い、活動を充実させていきたい。



(1) 教員養成に関する事項

② 大学企画講座における岡山市立学校長等の講演

I. はじめに

本年度、これまでの岡山大学教育学部附属教育実践総合センターが「教師教育開発センター」として全学化され、教職相談室はの中で教職支援部門を担うことになった。本稿では、岡山大学教育学部附属教育実践総合センターの事業として取り組んできた「高度な専門性と実践的な指導力を有する教師の育成プログラム」(以下、「教師力育成講座」)の成果を踏まえ、本年度継続的に実施した講座の概要及び成果と課題について考察した。

II. 全体構想

教職相談室における相談活動を通じて、在学生や新採用教員として赴任した卒業生たちの多くが、教育に関わる諸問題に対して不安を感じたり困惑したりしていることが明らかになった。このような不安を解消し、意欲的に教壇に立てる自信をつけていくこと、そのための「教師力」の育成をしていくことが急務であり、重要性が高まっていると考え、「教師力育成講座」が開発された。講座を開発するにあたり作成した仮説及び全体構想を示したものが図1である。

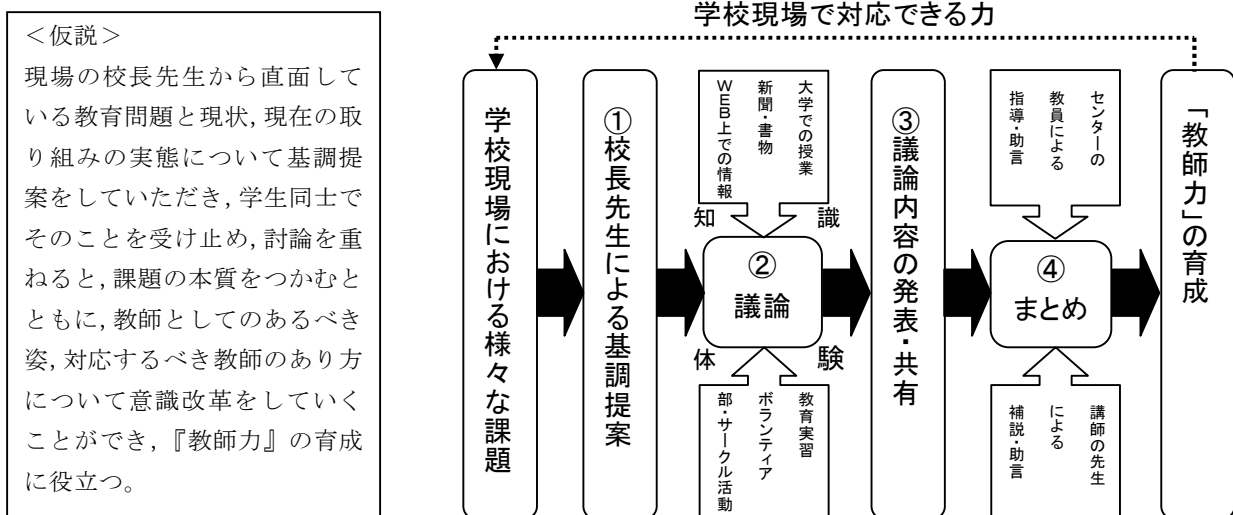


図1 「教師力育成講座」の仮説及び全体構想

※ 岡山大学教育実践総合センター

実施日	回	テーマ	講師
2009年 5月 27日	第1回	「子どもたちの生活とケータイの問題」	岡山市立中学校長
2009年 6月 24日	第2回	「発達障害など課題を抱えた子どもとどうかかわるか」	岡山市立小学校長
2009年 7月 8日	第3回	「いじめ・不登校の問題をどう考えるか」	岡山市立中学校長
2009年 10月 14日	第4回	「学校における「評価」について」	岡山市立中学校長
2009年 11月 25日	第5回	「道徳教育について」	岡山市立小学校長
2010年 1月 27日	第6回	「学校力の向上について」	岡山市立中学校長
2010年 5月 19日	第1回	「学校における食育推進」	岡山市立小学校長
2010年 6月 16日	第2回	「伝え合う力の育成」	岡山市立小学校長
2010年 7月 28日	第3回	「情報教育」	岡山市立中学校長
2010年 10月 27日	第4回	「外国語教育」	岡山市立中学校教諭
2010年 12月 1日	第5回	「理数教育の充実」	岡山市立小学校長

表1 「教師力育成講座」のテーマ

### Ⅲ. 本年度の講座に対する学生の満足度

#### 1. 「教師力育成講座」の概要

これまでに実施した講座のテーマを示したものが表1である。講師の先生からテーマに関する基調提案を聞いた後、学生達は6人前後のグループで議論を行った。約30分間の議論の後、各グループで出た意見を発表し、それを受けて講師がまとめの講評を行うのが1回の講座の流れである。

#### 2. 調査内容と質問項目

各回の最後には、講座に対するアンケートを行った。質問項目の概要は以下の通りである。

- ①基調提案（最初のお話）について、どのように感じましたか。
- ②グループでの話し合いは、活発に行われましたか。
- ③グループでの話し合い中、あなた自身の発言はどうでしたか。
- ④話し合いの時間の長さはどうでしたか。
- ⑤まとめ（最後のお話）について、どのように感じましたか。
- ⑥今回の講座で考えたことは、あなたが教師を目指す上で役に立つと思いますか。
- ⑦次回の講座も参加したいと思いませんか。

質問項目によって若干表現が異なるが、回答は、「とても考えさせられた」「どちらかといえば考えさせられた」「どちらかといえば考えさせられなかった」「考えさせられなかった」「分からない」等のように、5件法で回答するよう求めた。

各質問項目の回答について、選択肢1（例「とても考えさせられた」）を5点、選択肢2（例「どちらかといえば考えさせられた」）を4点、選択肢3「どちらかといえば考えさせられなかった」を3点、選択肢4（例「考えさせられなかった」）を2点、選択肢5（例「わからない」）を1点として集計した。無回答は集計から除外した。

この他、回答者の性別及び教員採用試験で受験する予定の学校種、受講した感想や質問（自由記述）、次回の講座で取り上げて欲しいテーマ（自由記述）等の質問項目を設定した。

#### 3. 結果と考察

各回の講座で行ったアンケート結果の平均値と標準偏差、年度全体の平均値・標準偏差、さらに2009年度と2010年度全体の平均値のt検定の結果を示したものが表2である。t検定の結果、「⑤まとめ（最後のお話）について、どのように感じましたか。」を除いたすべて

表2 講座についてのアンケート結果

		2009年度						2010年度					2009 合計	2010 合計	平均値の 差の検定	
		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)			t	p<
参加人数		36	68	76	34	23	37	60	58	35	24	31	274	208		
①基調 提案	平均	4.89	4.94	4.89	4.56	4.82	4.92	4.90	4.97	4.62	4.96	4.68	4.86	4.84	0.380	
	SD	0.31	0.24	0.31	0.77	0.39	0.27	0.30	0.18	0.54	0.20	0.78	0.41	0.45		
②話し 合い	平均	4.67	4.59	4.56	4.03	4.05	4.46	4.52	4.48	4.35	4.64	4.37	4.46	4.47	-0.188	
	SD	0.47	0.52	0.55	0.38	0.56	0.64	0.81	0.53	0.68	0.48	0.71	0.57	0.67		
③発言	平均	4.14	4.09	4.12	3.74	3.77	3.95	4.10	4.19	3.94	4.18	4.10	4.01	4.11	-1.375	
	SD	0.75	0.84	0.71	0.78	0.52	0.77	0.77	0.68	0.73	0.72	0.79	0.78	0.74		
④長さ	平均	4.31	4.22	4.05	4.35	4.18	3.95	4.22	4.40	4.06	4.59	4.37	4.16	4.30	-1.736	
	SD	0.46	0.89	0.86	0.87	1.03	1.04	0.90	0.85	0.87	0.78	0.91	0.88	0.88		
⑤まとめ	平均	4.75	4.85	4.75	4.76	4.86	4.81	5.00	4.95	4.85	4.91	4.87	4.80	4.93	-3.754	.001
	SD	0.72	0.55	0.46	0.42	0.34	0.39	0.00	0.22	0.35	0.29	0.34	0.51	0.25		
⑥考えた こと	平均	4.94	4.97	4.95	4.94	5.00	4.92	4.97	5.00	4.82	5.00	4.84	4.95	4.94	0.729	
	SD	0.23	0.17	0.22	0.24	0.00	0.27	0.18	0.00	0.38	0.00	0.37	0.21	0.24		
⑦次回 講座	平均	5.00	4.88	4.84	4.79	4.43	4.8	4.98	4.96	4.97	4.95	4.52	4.83	4.9	-1.478	
	SD	0.00	0.32	0.68	0.41	1.18	0.71	0.13	0.18	0.17	0.21	1.01	0.61	0.46		

の項目において、2009年度の平均と2010年度の平均値に有意な差はなかった。本講座は、昨年度と同様、学生達のニーズを的確にとらえた、質の高い内容を提供することができていたといえる。

以下に示した受講生の感想からも、本講座は学生達に単なる知識や技術を伝えるだけのものではないということがわかる。自ら学ぼうとする意欲や教職に対するモチベーションを高め、「教師力」が身についていることを自ら実感することができるのが、本講座の大きな特徴であるといえる。

<2010年度受講生の感想（一部）>

- よかったと思うことの一つ目は、講師の先生のお話を聞けることだ。試行錯誤を重ね、たくさんさんの経験を積まれた先生方の生の声を聞け、そして討論で仲間の意見を聞き、さらに深めていけたように思う。二つ目は、テーマにじっくり向き合えるきっかけとなることだ。仲間と意見を交換しあえる時間がとれるのは、本当に貴重だと思う。DVDで何度も見直すことができ、もう一度見てみるとまた違った見方も出来るのがおもしろい。この講座で学んだことを土台にし、常に子どもと向き合い、学び続ける教師でありたい。
- 真摯に向き合うべき課題であると、気づくことができた。先生方と子どもたちの関わりの中で課題に取り組んでいる姿、そのリアルな話を聞いてこそ、現場に出たいと思うことができた。講座で出会った全ての先生方、そして共に学んだ仲間に感謝している。
- 自分が教師としてどんなことをしていきたいかという思いをもつことができた。自分の目指す教師像に近づけるよう努力したい。
- この「教師力を身につけよう!講座」に参加する中で、着実に教師力が高まってきていると自信をもって言える。「あれもこれも実践したい」と思う、先生方の日々の努力の結晶を、仲間と共に学ぶ。先輩の先生方の松明を私たち学生が受け継ぐ場であったと思う。その松明をこれから出会う子どもたちや次世代の先生へと手渡していこう。
- この講座で、第一に、現場の声を聞いた。毎講座で、1年後の自分を想像しながら自分の思いを持っていくことができた。第二に、現場の愛を感じられた。学校現場には、こんなに素晴らしい先輩方がいてくださる、早く現場に出たいという思いをもった。
- 「今」の子どもや保護者が求めているものを、現場の先生の経験談、取り組みから考える

表3 受講生の所属

所属	2009年度						2010年度					2009年度		2010年度		
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	合計	%	合計	%	
学校教育 教員養成 課程	小学校	16	48	47	14	8	22	44	51	25	19	17	155	56.6	156	75.0
	中学校	5	3	15	7	13	6	11	1	2	0	3	49	17.9	17	8.2
	障害児	7	8	6	3	1	3	0	2	0	0	0	28	10.2	2	1.0
養護教諭養成課程	0	4	3	6	0	6	0	0	0	0	0	19	6.9	0	0.0	
教育学研究科	7	3	3	0	1	0	1	3	3	1	0	14	5.1	8	3.8	
特別別科/特別専攻科*	0	1	0	4	0	0	0	0	0	0	0	5	1.8	0	0.0	
他学部	理学部	1	0	1	0	0	0	0	0	2	1	8	2	—	11	—
	農学部	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	—	0	—
	工学部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	—	3	—
	環境理工学部	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	—	2	—
	MPコース	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	—	1	—
	文学部	0	0	0	0	0	0	2	1	2	3	0	0	—	8	—
他学部合計	1	1	2	0	0	0	4	1	5	4	11	4	1.5	25	12.0	
合計	36	68	76	34	23	37	60	58	35	24	31	274	100	208	100	

\* 特別別科＝養護教諭特別別科，特別専攻科＝特別支援教育特別専攻科

ことができ、自分が教師になったときのイメージを膨らませることができた。先生方の、子どもたちへの真摯で情熱的な指導や支援の姿勢からも、多くのことを学んだ。学生同士の討論では、先生のお話の内容を深く理解し消化することができ、また、現場でやってみよう、自分も気をつけたい、という意見も話し合う中で見つかった。

- 講座に出て、学生同士話し合いをしたり、講話を聞いたりすることで、自分の教育観を押し付け、“指導”しようとしすぎている自分に気づくことができた。目指すべき教師の理想像をより確かなものにして、実践していきたい。
- 一番驚いたのは言語活動の充実のために先生の学校で行われている活動である。「窓を開ける」という文でも軽い窓、重い窓などで言い方が全く違っていた。この講座で学んだことを自分でもっと深めていきたい。

#### IV. 他学部生の参加状況

##### 1. 他学部生への参加の呼びかけ

本センターの全学化に伴い、「教師力育成講座」も岡山大学の8課程認定学部における全ての教職志望学生を対象とすることとなった。昨年度も教職相談室の利用者を中心に、他学部生にも講座への参加を呼びかけていたが、十分に告知することができていなかった。本年度は講座のポスターを各学部にも掲示し、他学部生の参加を広く呼びかけた。

##### 2. 成果と課題

講座を受講した学生の所属を示したものが表3である。2009年度は他学部の受講生は4名（全受講者中の1.5%）であったが、2010年度は、第5回目の講座までの段階で25名（全受講者中の12.0%）に増えた。他学部の受講生としては、理学部・文学部が多かった。特に2010年度の第5回目の講座に参加した理学部の学生が多かったが、これはこの回のテーマが「理数教育の充実」であったことに起因していると考えられる。以上のことから、本年度の目標の1つであった他学部生の積極的な参加については、概ね達成できたといえる。

しかし、他学部の教員免許取得希望者が毎年約170名もいる現状からすると、本講座への参加者数は決して多いとはいえない。全学センターとして、全ての課程認定学部に対する教職支援及び教職に関する情報発信を、一層強く行っていく必要がある。

#### V. 「教師力育成講座」全体構想の再検証

##### 1. 講座担当者からの意見聴取

講座のあり方を見直すための新しい視点として、講師を担当した校長先生からの意見聴取を行った。これらの中には、今後の講座を改善・検討していく上での重要な示唆が含まれていた。講師を担当した校長先生の感想・意見は、以下の通りである。

##### ●教師力育成講座「食育」を担当して

講義内容は食育についてという依頼であったので、「学校における食育推進」という内容で、現在、食育の推進が盛んにいわれている訳、またその背景、そして、学校での食育推進の現状と課題について話をまとめ、グループ討議も含めて約2時間の講座であった。

本講座は、教育学部だけでなく教職課程認定学部全ての学生に案内し希望受講の講座であると事前に聞いていた。だから、学生は気楽な気持ちで参加するのだろうと高をくくっていた。しかし、教室に入ると学生が目差しと姿勢にその思いは一変し、学び取ろうとする熱意を感じた。過去に何度か講師を務めたことがあるが、今回は話をしているととても気持ちよく感じた。学生に感謝である。

そして、教師の「金の卵」を大事に育てるのでなく、現場の状況や厳しさ等を知らせ、覚悟を持って自らの夢であろう教師の道を進みなさいという親心にも似た岡山大学の本企画講

座にも感銘した。

この講座を受講した学生と、またどこかの学校で再会したいものである。

【岡山市立小学校長・2010年5月19日実施】

●教師力育成講座「伝え合う力の育成」を担当して

グループ討議では、さすがに4年生だけあって「話すこと・聞くこと」の領域での、具体的に、いろいろな指導方法を知っていることに驚きました。

実際には子どもたちの実態に合わせながら、その指導方法を改良していく力が教師として必要だと思い、最後の私の感想で話させていただきました。(百マス計算・・・1分間スピーチを例にとって)

終わってから、一人の学生さんが、「僕は高校を希望しているのだけど、高校でも手を挙げさせたり、発表させたりする授業が望ましいのでしょうか？」という質問をしてきましたので、私は「高校でも、生徒が意見をしっかり言える授業が出来たらいいですね。」と答えました。学生さんの真剣に聞いてくる態度が、すごく印象的でした。

校長としてどんな教員を採用してもらいたいかについて、

- ①学級経営がしっかりできる教員
- ②生徒指導のできる教員
- ③少々の困難があっても逃げない教員

などが大事だという校長が多く、学級経営がしっかりできる教師なら、子どもの学力や自ら学ぶ力(生きる力)も当然の伸ばす力を持っていることは確かだと言われます。

その点において、岡山大学では、学校現場をしっかりと見通した理論、具体的な指導方法、心構え等を大事にして学生に指導されていることがよくわかりました。また、「現場の先生からの問題提起」は、教師力を身につけるために、これからの教員をめざす学生にとっては、効果も大きく素晴らしい方法だと感じました。

【岡山市立小学校長・2010年6月16日実施】

●教師力育成講座「情報教育」を担当して

学校として具体的にどんな教育活動が有効であるか提案する段階になると、知識や経験の不足で具体的にならない場面がでてきて、学生たちの議論やまとめている鉛筆が止まる場面が多く見られるようになりました。

現状を分析する段階で足りない部分が見えてきて、立ち往生していたのです。学生たちには、その足りないものは何かに気づくことが大切であると伝えました。つまり、何が足りないか認識したら、対処する方法を見つけることができるということです(正解ではなく最適解)。そして、現場ではその解決に当たるのは「あなたである」ということ、人と協力してことに当たることの価値と、そうすれば喜びが増し視野も広がることを伝えました。学生たちは、「それでいいのか」と力を抜いて受け止めてくれました。解決できない壁に突き当たったときこそ自分自身のパラダイム変換ができるチャンスであり、それができるかどうかは日ごろの問題意識にあると思います。

私自身うまくいかなかったことや、危機的な状況に陥ったことなど失敗例を織り交ぜながら話を進めました。短い時間でしたが、思いが先行してまとまらない内容でしたが学生たちは熱心に受け止めてくれ、充実した時間を過ごさせていただきました。

【岡山市立中学校長・2010年7月28日実施】

これらの意見から、今後の学生に対する指導及び講座の改善のポイントを次のように考えた。

- ①現場の状況や厳しさ等を知り、覚悟を持って教師の道を進むこと
- ②現場からの問題提起、具体的な指導方法、心構え等の大切さを受け止め、指導すること
- ③学生自身が、(教師として指導する上で) 足りないことに気づくこと。

## 2. 講座担当者が行った講評の検討

各回の講座では、学生達が議論の結果を発表し、それを受けて講師の先生からまとめの講評をしていただいている。そこでの発言の中で、本講座の本質ともいえる重要な内容に言及している部分があった。以下は2人の校長先生が「まとめ」で行った講評の一部を抜粋したものである。

### ●2009年度第2回講座「発達障害など課題を抱えた子どもとどうかかわるか」での講評(一部)

先ほど、保護者へ事実をきちっと伝えていくというお話がありましたが、これをきちっと保護者へ伝えたら大変なことになります。保護者との連携は生易しいものではありません。発達障害を抱えた子どもは、生まれた時から育てにくいです。育てにくいのを保護者は一生懸命に育てます。だけどいくら頑張っても上手くいかない。保護者は自分の子どもがどんなことで人に迷惑を掛けているのか、どんなことで困っているのか、学校でも自分の子がどのようなことをしているのかをよく知っています。一番分かっているのは担任ではなく保護者なのです。

また、障害を抱えた子どもも、自分はものすごく悪い子で、何やっても叱られてばかり、おじいちゃん、おばあちゃんからは従兄の中で一番悪いと言われ、近所でも、どこへ行っても嫌われる、お友達はできないことをよく分かっています。しかし、分かっているけれど、どうにもならない。保護者も分かっているけど、どうにもならない。それを改めて言われたら周りは皆敵だと思い、だんだん嫌になってきます。だから、素直に保護者との連携はできないのです。

私も保護者と話をしますが、第一声目には「お母さん苦勞されましたね。ごめんなさいね。学校の対応が十分ではなくつらい思いをさせて本当にごめんなさいね。」という言葉の掛けます。そして、そこから保護者との話し合いがやっとできます。お母さんも大きな涙を流しながら、実はこんなにつらかったのだとお話をされます。自分ではどうにもできなかったことを先生だからできる、先生だからしてくれた、さすが先生と思われて初めて信頼関係が結べるのです。できないことを教えられても信頼関係は結べないのです。ですから、関係機関へ繋ぐことは簡単なことではありません。簡単にできることではないのです。

【岡山市立小学校長・2010年6月24日実施】

### ●2010年度第2回講座「伝え合う力の育成」での講評(一部)

今日は「伝え合う力」ということでお話をさせていただき、そのテーマで皆さん話をしました。一つ気になることがあります。皆さんは学生で教育実習しかしていません。1分間スピーチで子どもの力をという話が出ましたが、1分間スピーチひとつにしてもそれが本当に良いのかどうか。

例えば百マス計算。百マス計算を良しとしてやってしまうと、大変なことになります。百マスするのであれば、私の学校では二十マス、いや、十マスのほうがよっぽど良い。「よーいドン」で計算させたら百マスは長すぎる。子どもが集中できる十マスを繰り返しやった方がよっぽど効果がある。書店などで百マス計算が良いという本が出れば、みんな良かれと思ってやってしまう。そうではなく、皆さんがもし現場で子どもの前に立った時、実際にいろいろやってみてください。例えば百マス計算に至るまでに、十マス計算、二十マス計算と増やしていき、やがて百マス計算へ。

1 分間スピーチも同じで、最初はたどたどしい話しかできません。恥ずかしくてできない子どもや、消極的な子どもは人前では話せません。そんな子どもに1分間しゃべれと言われても苦痛です。子どもを困らせないでください。苦手な子どもには、最初は10秒、20秒にする。話せない子どもには10秒間分のメモを書かせ頑張って読んでもらう。その子どものレベルに合ったことを徐々に上げていく。1分間スピーチが良いからといって、最初から先生が1分間頑張らましようとした場合、大変なことになります。だから、そういうことは実際に具体的に体験してみてください。1分間スピーチに至るまでに、子ども全員がしっかり1分間話せるようになるまでどういう段階が必要になるかが分かるようになります。

【岡山市立小学校長・2010年6月16日実施】

これらの講評内容を検討した結果、本講座の最大のポイントは2つの「気づき」であることが明らかになった。

学生同士がそれぞれの知識や経験を持ち寄って議論することにより、自分が体験したことのない知識や経験を知ることができる。その結果、個人が考えただけでは到達できないような結論を導き出すことができる。これが第一の気づきである。しかし、そこでの議論の結果を「まとめ」の際に発表した時に、「現実はそんなものではない」と講師の校長先生から、時には厳しく、時には諭すように指導されることがある。これが第二の気づきである。学生達が一生懸命考え抜いた結論であっても、学校現場では通用しないことを知る。そこで、学生達は教職の難しさ、奥深さを実感し、そこから「もっと学びたい」「もっと体験したい」という意欲が生まれる。これこそが本講座において身につけさせたい力であり、このように自ら考えて実践しようとする姿勢が身につけば、これから学校現場で出会う様々な課題に対しても適切に対応できると考えた。

### 3. 新しい全体構想図の作成

前掲の図1で示した通り、従来の全体構想図では講座内容の「基調提案」「議論」「議論内容の発表・共有」「まとめ」を並列的にとらえていた。しかし、2年間の取り組み及びその成果の検証を通じて、本講座の特徴は2つの「気づき」であることが明確になった。新しく作成した全体構想図が図2である。

## VI. おわりに

今後の課題として、以下の2点を考えている。

### 1. 「教職実践演習」との関連

「教師力育成講座」では、在学生や新採用教員として赴任した卒業生の不安や問題意識、さらに彼ら自身の教師力の実態を踏まえたプログラム作りに取り組んできた。今後、より現場に役立つ教師力を育むためには、平成25年度からスタートする「教職実践演習」と本講座との関連を考え、教職実践演習を通して学ぶ内容やつかんでくる学生からの情報を的確に把握し、さらに実践現場に生きる知識や経験に深めるため、本講座の内容を見直す必要がある。

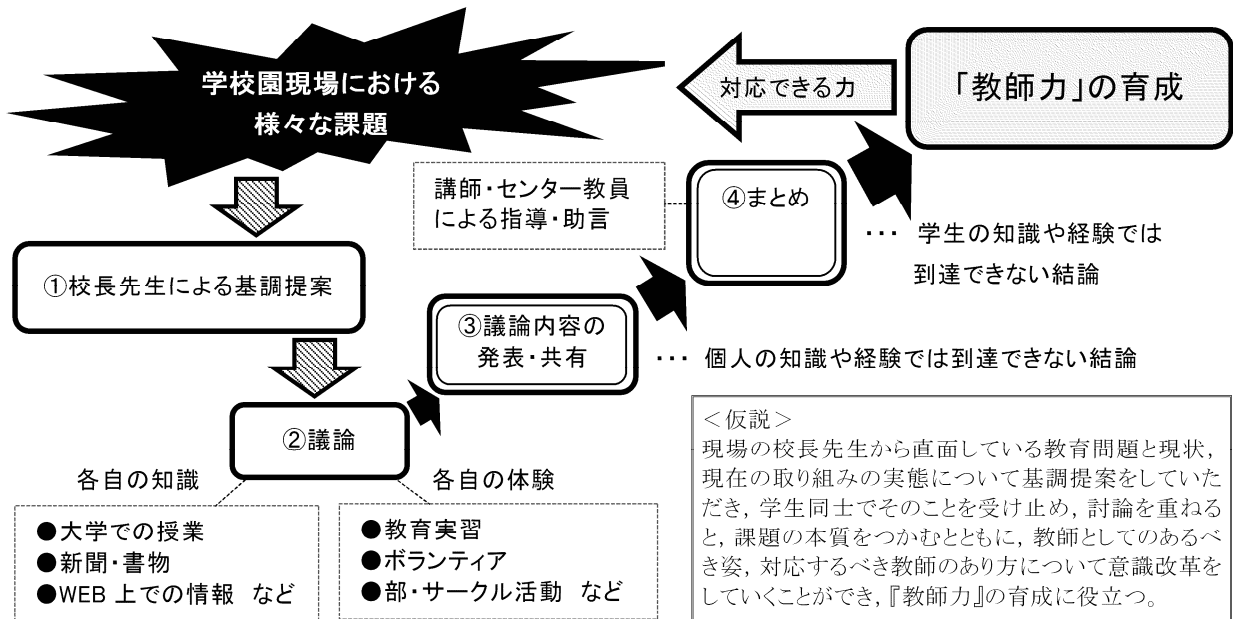
### 2. 教員の資質能力について

教員に求められる資質能力については、様々な考えがある。

文部科学省は、平成18年7月11日の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」において、教職課程の改革の方向及び具体的方策を次のように示している。

#### ・改革の方向

大学の教職課程を、教員として必要な資質能力を確実に身に付けさせるものに改革する。





## (1) 教員養成に関する事項

### ③ 大学と学校園現場との連携に関わる調査研究

#### 1 調査の目的

岡山大学教育学部・岡山大学大学院教育学研究科（以下、岡山大学教育学部）と岡山市教育委員会は、平成21年3月に、教員の資質・能力の向上等の課題に対応するため、相互協力して双方の教育の充実・発展に寄与する事を目的に連携協力協定を締結した。しかし、岡山大学教育学部と岡山市教育委員会の連携協力事業については初年度を終えたばかりであり、連携の目的である「双方の教育の充実・発展」につながるような詳細な成果と課題の検証までには至っていない。

本研究では、学校園現場と大学の連携協力をより充実させていくために、「学校園現場が大学や大学教員に期待している事は何か」など現場の生の声を把握することを目的としてアンケート調査を実施し、回答についての分析・考察を行った。

#### 2 方法

##### (1) 調査対象及び調査方法

平成21年度に「いきいき学校園づくり」事業に指定された岡山市内9中学校区の幼稚園・小学校・中学校49校園を対象として、各学校園の校長と研究主任（幼稚園は主任）に、同一のアンケート調査を行った。調査用紙は、平成22年10月1日付で対象学校園に送付し、提出期日は10月15日までとした。調査用紙の送付数及び回収数・回答数を示したものが表1である。

表1 調査用紙の送付数と回収数・回収率

学校種	送付数	回収数	回収率
幼稚園	17	16	94.1%
小学校	23	21	91.3%
中学校	9	8	88.9%
全体	49	45	91.8%

##### (2) 調査内容と質問項目

平成21年度の「いきいき学校園づくり」における取り組み及び事後アンケートの質問項目等を参考にしながら、学校園現場が必要としている指導・助言及び支援に関する選択肢を作成した。回答は、連携に期待する項目を以下に示したア～ケの選択肢の中から3つ選択するよう求めた。この他、大学教員及び大学生等に配慮して欲しい事項等を自由記述する質問を設けた。

##### 【大学教員に期待すること】

- ア：学校（園）経営・学校（園）運営に関する指導・助言（学校種間連携、教育課程、学習評価、教職員評価など）
- イ：授業（教育活動）づくりに係る研修に関する指導・助言
- ウ：教科・領域の専門性に係る研修に関する指導・助言
- エ：生徒（園児）指導・教育相談に関する指導・助言
- オ：その他

##### 【大学生等に期待すること】

- カ：教科指導（教育活動）への支援
- キ：個別の幼児児童生徒への支援
- ク：校（園）務（校園内環境整備・学校園安全など）への支援
- ケ：その他

### 3 結果と考察

#### (1) 大学との連携で期待すること（全体概要）

選択肢に対する回答を集計したものが図1である。選択肢のア～オは大学教員に期待することであるが、回答数が最も多かったものは「イ：授業づくりに関する指導・助言」であった。また、選択肢カ～ケは大学生等による支援を期待するものであるが、回答数が最も多かったものは「キ：個別の幼児児童生徒への支援」であった。

回答を「大学教員に期待すること（選択肢ア～オ）」と「大学生等による支援を期待すること（選択肢カ～ケ）」に分けて集計したものが図2である。この結果から、学校園は、大学教員による専門的な立場からの指導・助言だけでなく、マンパワーとして多くの大学生等が学校園に来て教育活動を支援してくれることを期待していることが明らかになった。

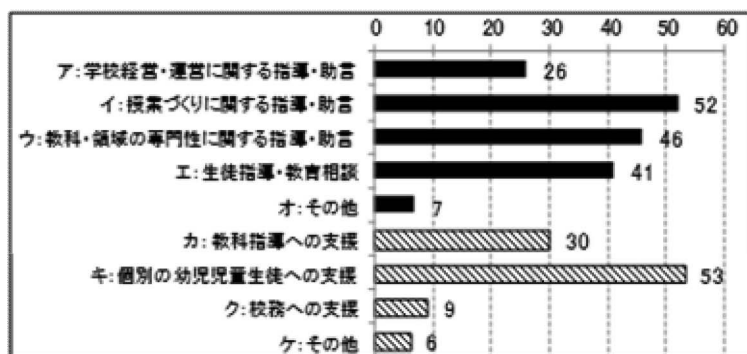


図1 全体の集計結果

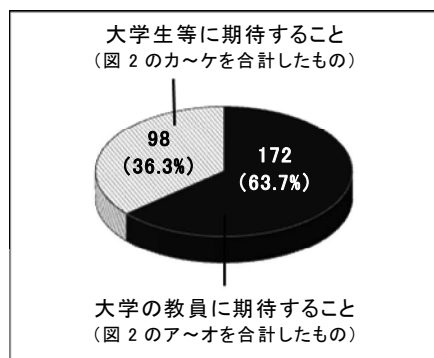


図2 対象別の集計結果

#### (2) 学校種間の比較

幼稚園・小学校・中学校の学校種別に回答を集計したものが図3である。幼稚園では、大学教員に期待することとして回答比率が最も高かったものは「ウ：教科・領域の専門性に関する指導・助言」であった。大学生等に期待することとして、回答比率が最も高かったものは「キ：個別の幼児児童生徒への支援」であった。

小学校・中学校ともに大学教員に期待することとして回答比率が最も高かったものは「イ：授業づくりに関する指導・助言」であった。大学生等に期待することとして、小学校で回答比率が最も高かったものは「キ：個別の幼児児童生徒への支援」であった。中学校では「カ：教科指導への支援」と「キ：個別の幼児児童生徒への支援」が同数であった。

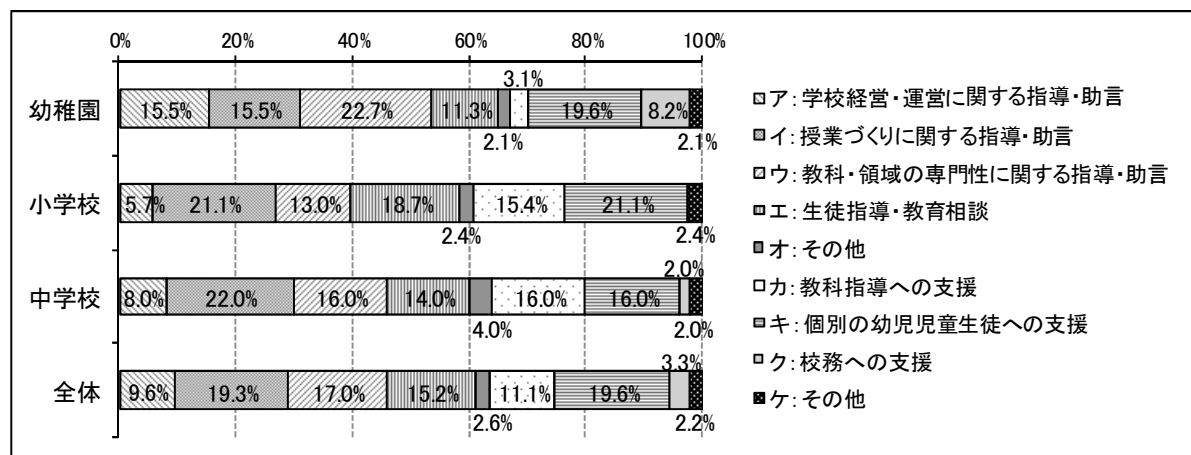


図3 学校種別の集計結果

### (3) 職種間の比較

回答者の職種別（校園長または主任）の集計結果を示したものが図4である。大学教員に期待することについて、校園長の回答比率が高かったものは「ウ：教科・領域の専門性に関する指導・助言」「ア：学校経営・運営に関する指導・助言」「イ：授業づくりに関する指導・助言」の順番であった。一方、主任の回答比率が高かったものは「イ：授業づくりに関する指導・助言」「ウ：教科・領域の専門性に関する指導・助言」「エ：生徒指導・教育相談」の順番であった。

大学生等に期待することとして、校園長の回答比率が高かったものは「キ：個別の幼児児童生徒への支援」「ク：校務への支援」の順番であった。主任の回答では「カ：教科指導への支援」と「キ：個別の幼児児童生徒への支援」が同数であった。

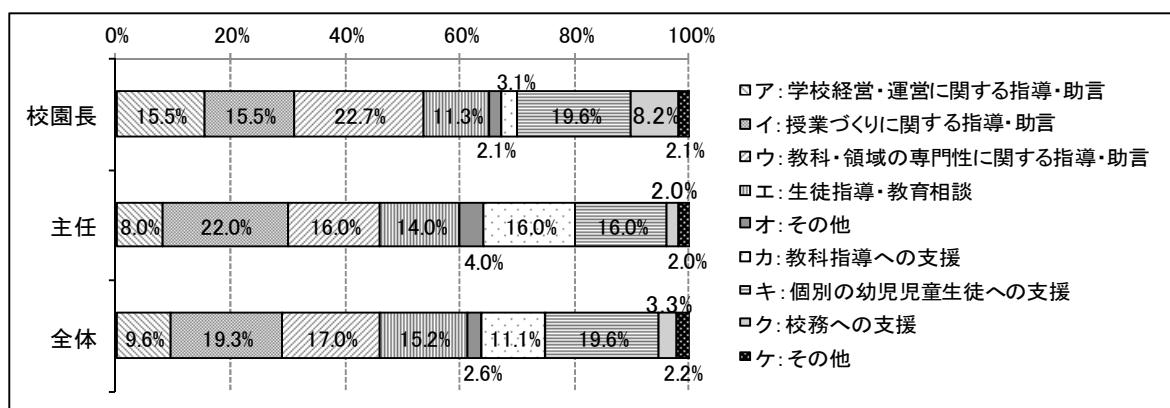


図4 職種別の集計結果

### (4) 自由記述の分析・考察

#### ① 大学教員の指導・助言に求めること

「指導・助言にあたって大学の教員に配慮してほしいこと、お願いしたいことがあればお書き下さい。」という自由記述の質問に対して、90名中76名から回答があった。このうち、質問の意図と異なる内容（謝辞等）が書かれていた2名の回答を除いた74名の回答を分析の対象とした（回答率：82.2%）。出現回数が多かったキーワードを集計した結果が表2である。なお、回答中に異なる複数のキーワードが含まれていた場合、それぞれを1回として集計した。また同一文中に複数回出現したキーワードは、1回として集計した。

最も多く使用されたキーワードは「現場」であった。このほか、「実態」「具体的」「実情」「実際」「様子」「把握」などのキーワードも多く使用されており、学校園の先生方は現場の実態を踏まえた具体的な指導・助言を期待していることが明らかになった。

- 実際の幼児の実態に即した具体的な保育内容や現場の実情に合った保育内容に対する指導・助言をしていただきたい。【幼稚園・主任】
- 具体的な指導・助言をお願いしたい。継続的に（年に数回等）お願いしたい。【小学校・校長】
- 本校の学習面，生活面の実態，家庭教育力，地域性を把握した上で指導・助言をお願いできればと思います。【中学校・校長】
- 学校の実情にあったもの。3カ年～5カ年の継続性があるといい。気軽に連絡・調整ができるようにしてほしい。【中学校・校長】

表2 抽出したキーワード(大学教員に対して)

抽出語	出現数	出現率
現場	18	24.3%
実態	17	23.0%
具体的	10	13.5%
専門	10	13.5%
実践	8	10.8%
実情	7	9.5%
継続	6	8.1%
実際	6	8.1%
把握	6	8.1%
様子	6	8.1%
理論	6	8.1%
研修	5	6.8%
有効回答数	74	

表3 抽出したキーワード(大学生等に対して)

抽出語	出現数	出現率
継続	14	19.7%
理解・把握	13	18.3%
現場	11	15.5%
積極的・積極性	9	12.7%
教職	9	12.7%
守秘・秘密	8	11.3%
コミュニケーション・関わり	6	8.5%
特別支援	6	8.5%
定期的	6	8.5%
言葉・言動	5	7.0%
実態	5	7.0%
時間	5	7.0%
有効回答数	71	

\* 出現率は、出現数を有効回答数で割ったもの

## ②大学生等による支援に求めること

「支援にあたって大学生・大学院生に配慮してほしいこと、お願いしたいことがあればお書き下さい。」という自由記述の質問に対して、90名中71名から回答があった(回答率:78.8%)。出現回数が多かったキーワードを集計した結果が表3である。

「継続」「定期的」などのキーワードから、学校園の先生は、同じ人物ができるだけ継続して支援に参加することを期待していることが明らかになった。また、幼児児童生徒の実態を理解・把握して支援にあたることも求められている。

- 継続してほしい(少なくとも一年間)。相互に話し合い(教諭と大学生・院生)ができるようにお互い工夫ができるとよい。【中学校・校長】
- 学校及び学級経営を理解しての支援の立場でお願いしたい。【小学校・研究主任】
- 指導する教員の意図に沿った支援をしていただきたいです。児童としっかり話したり遊んだりしながら積極的にコミュニケーションをとって下さるとありがたいです。【小学校・研究主任】

## 4 今後の課題

本研究の調査結果として、多くの先生方が、大学教員に対して学校園現場の実態を踏まえた、具体的かつ継続的な指導・助言を求めていることが明らかになった。日頃から子どもたちや先生方の実情を把握するためにも、大学教員が積極的に学校園と関わるができるような環境を整備していかなければならない。また今回の調査は、学校園長及び研究主任を対象としたものであったが、日々の生活の中で子どもたちとより直接的に関わっている担任の先生等への調査を実施することも必要であると思われる。

大学生等に対しては、同じ人物が継続して支援に参加すること、学校園や子どもたちと積極的に関わり、学校園の実態を理解・把握して支援にあたること、社会人としての最低限度の常識やマナーを身につけておくこと、等を求める声が多かった。ボランティアとはいえ、学校園現場に行き子どもたちと向きあう以上、社会人として適切な言動をとることができるよう、大学生等をしっかりと指導していく必要がある。

## (2) 教員研修に関する事項

### ① 学力・授業力アップ支援事業

#### 1 事業の趣旨

- (1) 本市児童生徒の学力面に共通する課題を解決するため、教科・学校種の枠を超えた研究体制の強化を図り、小・中の9年間を見通した系統的な学力の育成を目指す。
- (2) 岡山市の学力の課題から設定した視点からの授業づくりについて、その企画段階から大学教員に参画していただき、視点の持ち方、課題設定の在り方等について指導・助言を得る。このことで、校内研究の核となる教員が、自身の授業力を高めながら、喫緊の課題に即した具体的な授業づくりのアイデアを校内で提案し、課題解決に向けた校内研究の舵取りを効果的にできるようにしていく。

#### 【現状】

- 本市の児童生徒の学力面での課題は、すべての教科・領域を貫く課題である。
  - ・「読解力」や「表現力」の育成
  - ・「学ぶ意欲」の向上
  - ・「日常生活につながる学びの活用」の充実
- こうした課題を解決するには、「教科を横断的に見渡す的確なテーマ設定」「教科のつながりを意識した系統的な方策」等が必要となり、新たな研究の視点や仕組みづくりが求められている。

#### 【期待する事業効果】

- 新たな視点からの授業づくりが可能になるとともに、校内研修を効果的に運営・指導できる教員が育成される。
- 「授業で変わる！いきいき岡山っ子育成事業」のうち、「いきいき学校園づくり」との連携により、各学校の研究体制や学力面での組織運営力が強化される。

#### 2 事業の内容

本市の共通課題や今日的課題に対応した「授業づくりの支援」「校内研究体制の実現」を目指し、以下の事業展開を図ることとした。対象は、校内で教科研究を中心となって推進している研究主任や教科主任。

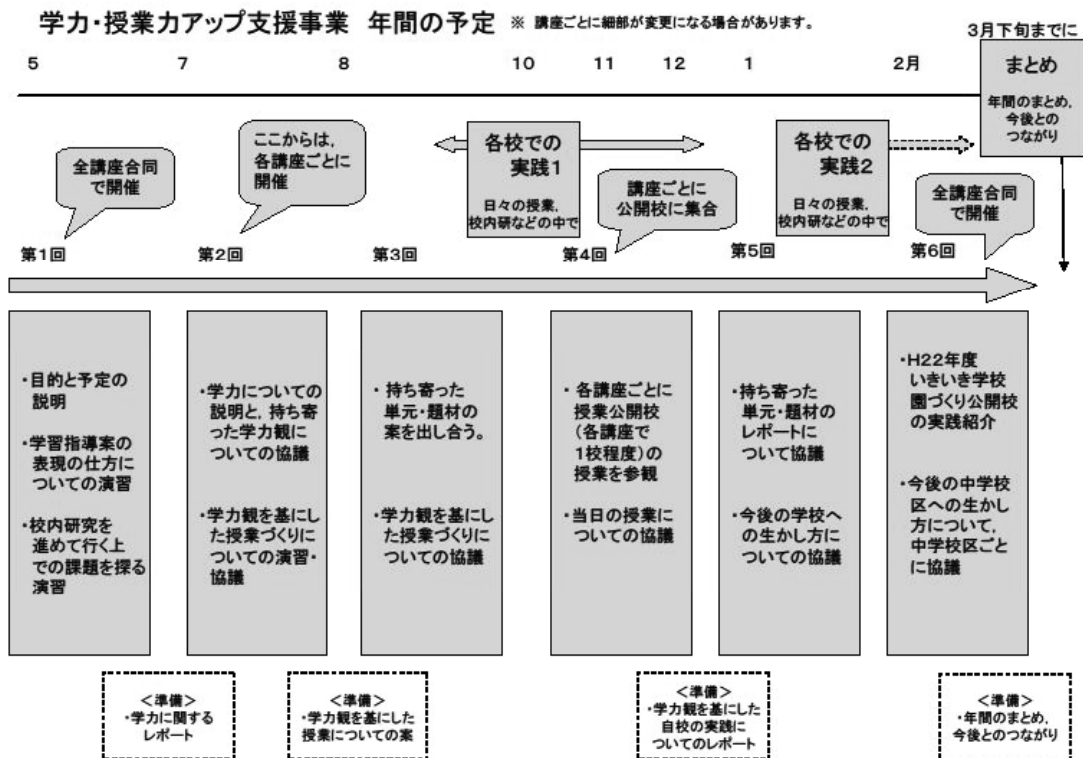
また、2年後に「いきいき学校園づくり」（いわゆる計画訪問）の対象となる学校を中心に希望校を組み入れることで、該当校の授業づくりの方向性や課題を明らかにし、中学校区での授業づくりにおける改善方策の提供をより確かなものとした。

○演習形式の研究協議を取り入れた、新たな視点からの授業・指導モデルの開発

- ①学習指導案・単元構想表・授業記録等への直接的な指導を行い、新たな視点を取り入れた学習指導案や指導方法の研究・開発の支援を行う。
- ②テーマ別で開催する講座内での研究協議に対し、「今日的課題に対応する改善方策の妥当性」「協議における観点提示の的確さ」等の視点からの指導を行い、各講座受講生の校内研究を企画・運営する力を高める。

○開設したのは、以下の4講座。各講座には、岡山大学大学院教育学研究科の先生方の協力を得ている。

- ・講座1（尾島 卓先生）……「読解力」を育成する授業づくり
- ・講座2（桑原敏典先生）……「活用力」を育成する授業づくり
- ・講座3（山崎光洋先生）……考えを深める「表現力」を育む授業づくり
- ・講座4（佐藤 暁先生）……学習への「意欲」を高める授業づくり



### 3 大学との連携の視点

大学教員による公開授業後の指導だけでなく、資料を基に受講生が行う研究協議について、授業の企画・構想段階における視点の持ち方、課題設定の在り方等の視点から指導・助言していただくことに重きを置いた。そのことにより、校内研究において核となる教員の授業力・実践力を高めることをねらっている。

### 4 本年度の状況

講座1…小4校，中1校      講座2…小1校，中4校  
 講座3…小15校，中3校      講座4…小7校，中5校      計40校

### 5 成果と課題

大学教員との連携が3年目となり、講座ごとに適切な指導・助言をいただいた。

また、受講者への事後アンケートからは、以下のような成果を読み取ることができる。

- ・大学教員の指導のもと、公開授業や実践発表の協議会を実施することで、校内研修における視点の持ち方や運営方法を学ぶことができ、校内の取組に生かすことができた。
- ・他校や異校種の授業を参観することで、児童生徒の興味・関心や学習意欲、自主的探究心を喚起する方法を学び、自らの授業実践に生かそうという意識が高まった。
- ・問題解決の学習過程を組む中で、めあて達成のために適切な支援を行うことの大切さを再認識し、学習指導案を書く上でも、めあてを明確にし、それに対する支援をより具体的に考えるようになった。

今後は、本事業を教育センターの事業として実施し、教員研修の一元化を図るとともに、視点を明らかにした事業を展開し、受講者の指導力と中学校区を意識した授業づくりを進めていきたい。

(2) 教員研修に関する事項

② 授業で変わる！いきいき岡山っ子育成事業

1 事業の趣旨

指導主事と大学教員とが連携し、発達の各段階を貫く共通課題や学校種間の接続の課題の解決に向けて、中学校区の学校園全体の教育実践や中学校区で取り組むべき改善方策を提供・検証する。また、この過程を通して、子どもの学びを中学校区で考える岡山型一貫教育を実現し、確かな学力を身に付けた自立する子どもの育成を目指す。

【期待する事業効果】

- 各学校園の教育活動が、学力向上や学びの連続性の視点から再構築されることで、子どもたちにとって円滑でつまずきの少ない学習が保障される。
- 中学校区や各学校園の特性を最大限に生かした特色ある教育が展開できる。

2 事業の概要 …… 就学前～義務教育修了までの一貫した教育への支援

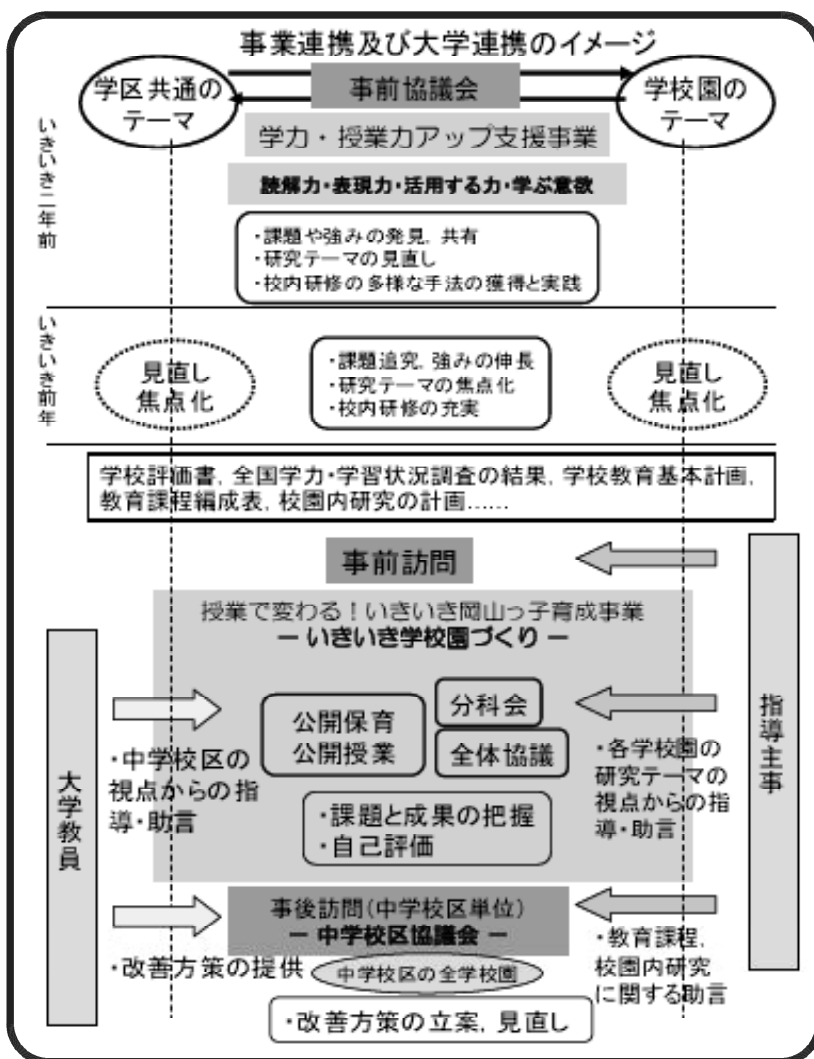
平成20年度まで実施していた学校訪問を、同一年度に中学校区の全学校園を訪問するよう平成21年度から変更した。

訪問時には、指導主事と専門的な見識を有する大学教員が共同して指導を行う。訪問は年間9中学校区とし、4年間で全中学校区を回る。

また、中学校区内の全学校園の訪問が終了した後、管理職・研究主任を対象とした中学校区協議会を開催し、大学教員は組織マネジメントの視点から、指導主事は中学校区の校園内研究の一貫性の視点から指導を行う。

さらに、対象となる学校園の校園長・教員に対し、公開保育・授業の実施前と実施後の2回、評価シートによる意識調査を行う。その調査で個人別に評価の上昇率を見ることにより、

校園長・教員の本事業を通しての保育・授業づくりにおける課題改善に向けての取組の状況を把握し、本事業の効果を測る。



### 3 大学との連携の視点

これまでの学校訪問により、授業づくりに組織で取り組む体制が各学校園に構築されてきたが、課題や改善方策は中学校区で大きく異なる。例えば「授業内容・人間関係づくり・地域人材や場の確保」等の課題を「どの時期に、どの程度、どんな手法で、どんな検証をしながら」克服していくかは、地域の実態や学校種により様々である。

指導主事は、学校園単位での指導は行ってきたが、中学校区を貫く課題に対する改善方策を学校園や地域に明確に示すには、先進的な知識と技能を有する大学教員との連携が必要であると考えた。

#### ※ ご指導いただいた先生（岡山大学）

岡輝中学校区	藤井 浩樹 先生	岡輝中，岡南小，清輝小，岡南幼
高松中学校区	田中 智生 先生	高松中，鯉山小，加茂小，庄内小，鯉山幼，加茂幼，庄内幼
御南中学校区	高旗 浩志 先生	御南中，御南小，西小，今幼
竜操中学校区	高瀬 淳 先生	竜操中，竜之口小，幡多小，財田小，竜之口幼，幡多幼，財田幼
富山中学校区	高瀬 淳 先生	富山中，富山小，富山幼
灘崎中学校区	尾島 卓 先生	灘崎中，灘崎小，七区小，彦崎小，灘崎幼
妹尾中学校区	熊谷慎之輔 先生	妹尾中，妹尾小，箕島小，妹尾幼

### 4 本年度の状況

大学教員に参加していただいた学校園については、幼稚園は保育終了後、小中学校は、分科会の時間等に校長との面談を実施した。

当該校園では、原則として、指導課管理職が進行役を務め、校長が学校の現状等の説明を行った後、大学教員による学校園の情報収集を兼ねた懇談を行っている。

本年度については、大学教員に学校園の実状を知っていただくことに加えて、マネジメントの視点からその場で気付いたことについて指導していただいた。今後、回を重ねることで第三者評価として位置づけることが期待できる。

中学校区協議会（事後訪問）について、園長あるいは教頭のグループによる協議を大学教員に担当していただいたことで、中学校区を俯瞰した組織経営について協議することが可能となった。中学校区で管理職が集まる機会は年間に何度かあるが、多くは事務レベル・行事レベルの内容であり、中学校区の授業づくりについて考える時間を確保できたことの意義は大きいと考える。

### 5 成果と課題

大学との連携が可能となり、組織マネジメントの視点が本事業に加わったことで、特に、校長の意識が高まっている。また、自校の課題追究と中学校区での授業づくりを連携させて考える学校園が増えていることも、一貫教育を推進する上での大きな一歩と言える。

教育委員会をはじめとする諸団体の行事等の日程が新年度が始まってからの決定となり、いきいき学校園づくりの日程がそれ以降の決定となるため、依然、大学教員との日程調整の難しさは課題として残るが、いきいき学校園づくりにおける大学教員の参画の在り方等を見直ししながら、本事業を充実させていきたい。



(2) 教員研修に関する事項

③ 教職員への指導・助言

1 平成22年度における総合教育センター主催事業

平成22年度において、次の講座で岡山市の教職員に対する指導・助言をいただいている。

講座名	大学教員	研修のねらい	研修内容
10年経験者研修講座 E S D（持続可能な社会の担い手を育てる教育）	桑原敏典先生	「環境」や「国際理解」を中心とした分野で行っている教育活動を、持続可能な社会づくりという視点で、より効果的な活動にしていこう。	岡山E S Dプロジェクト（岡山E S D推進協議会）等の実践事例の紹介。また「環境」や「国際理解」を中心とした分野で行っている教育活動を、持続可能な社会づくりという視点で、より効果的な活動にしていくための講義と演習。
20年経験者研修講座 マネジメント研修	高瀬 淳先生	学校組織マネジメントの意義についての講義や、自己のキャリアを振り返る演習をとおして、学校組織における自らの使命や責任について考えよう。 SWOT分析の手法を学んだり、自校の学校経営計画を見直したりすることをおして、2学期以降、自分が学校のために取り組むべき課題について考えよう。	○今日の社会の変化と学校組織マネジメント ○自己のキャリアの振り返り ○課題についての説明 ○自校のSWOT分析と学校経営計画の見直し ○アクションプランの立案 ○まとめの講義

2 いきいき授業づくり講座

(1) ねらい

- ・ 大学教員等の指導・助言を得ながら、新学習指導要領の趣旨を生かした授業改善を図る。

(2) 内容

- ・ 指導者 田中 智生 先生
- ・ 第1回 講話『新学習指導要領の趣旨を生かし、言語活動を取り入れた国語科の授業づくり』
- ・ 第2回 校内研修授業公開の指導・助言
- ・ 第3回 岡山市全体に向けた授業公開の指導・助言

3 成果と課題

(1) 成果（多様な連携）

現在、本市で大学教員に指導・助言をいただいているケースとして、次の3種類がある。学校園には多様な課題があるが、その解決に資することができる。

- ① 岡山市総合教育センター主催事業
- ② 指導課主催事業
- ③ 各校が大学との直接交渉でお願いしている場合

(2) 課題（依頼窓口の整理）

- ・ 教育委員会内での調整が十分には図れておらず、他の大学連携事業の講師等と重なっていたり、特定の教員に依頼が集中したりした。来年度以降、大学への依頼の調整を図る必要があると考える。

### (3) 学校教育上の諸課題への対応に関する事項

#### ① その他のボランティア制度

---

## 1 本市主催事業に係る学生ボランティアの状況

### (1) 習熟度別サポート事業

○大学院生の採用

### (2) 教育相談室運営事業

○適応指導教室（トラングルー宮）

○教育相談室・中央適応指導教室（あおぞら清輝）

## 2 成果と課題

### (1) 多様な受け入れ機会の創出

現在、本市で受け入れている学生ボランティアには、以下の5種類がある。

- ① 習熟度別サポーター（習熟度別サポート事業）
- ② 不登校支援ボランティア（市教育相談室，適応指導教室でのボランティア）
- ③ 学生ボランティア（岡山市学校支援ボランティア制度）
- ④ 岡山大学インターンシップ学生
- ⑤ 各学校が大学との直接交渉で受け入れている学生

平成21年度より、多様な受け入れ形態が設けられたことで、学生・大学院生の選択の幅や各学校園の受け入れ機会が増えている。

### (2) 受け入れ窓口の整理・一本化

上記の点は、連携協力の成果といえる一方、多様な受け入れを行うがゆえの学生及び学校園の混乱も見られる。本年度については、岡山大学に「スクールボランティアビューロー」が設置され、学生ボランティア運営への積極的なかわりがなされ、学生ボランティアの広報，周知，調整等について学校の混乱が減少した。

### (3) 周辺部の学校園への派遣・受け入れを促進させるための支援

受け入れ校が、どうしても大学周辺の学校園に集中し、周辺部の学校園については、毎年希望を挙げても学生の受け入れがない状況が続いている。交通費補助等の支援が難しい現状の中で、自宅通学生への地元校，或いは、地元近隣校への派遣についてのPR活動が必要と考える。



IV

その他事業における岡山県・岡山市等との連携

- 1 理数系教員（C S T）養成拠点構築事業について
- 2 岡山大学教員と岡山県・岡山市教育委員会等との連携の取組（参考資料）



## IV その他事業における岡山県・岡山市等との連携

### 1 理数系教員（CST）養成拠点構築事業について

（独）科学技術振興機構（JST）が実施する「理数系教員（コア・サイエンス・ティーチャー）養成拠点構築事業」に、平成22年度に岡山大学と岡山県教育委員会が主たる実施機関として提案した「科学の醍醐味を教科構成力・研修構成力に展開できる理数系教員養成ネットワーク拠点形成」案が採択された。本取り組みでは、岡山大学と岡山県、岡山市、倉敷市教育委員会が連携し、岡山県の理数教育の充実を目指して、新たな理科教員養成プログラムと理科支援のシステムを開発する。現職教員や教員養成課程の大学院生の中からコア・サイエンス・ティーチャー（CST）を輩出し、彼らが地域の小中学校理数教育において中核的な役割を担う仕組みを整えることで、岡山県の理科教育の振興をはかることを目指している。平成25年度までの支援期間内に、その基盤を整え、以後も継続的に人材輩出を進めていく。そのために、平成22年8月9日に、全学組織である「教師教育開発センター」の中に、専門部門として「理数系教員養成事業部門」を新たに設置して実施体制を整えている。

本取り組みの詳細については、<http://cted.ed.okayama-u.ac.jp/cst/index.html> に示しており、「理数系教員（コア・サイエンス・ティーチャー）養成拠点構築事業」の採択状況については <http://www.jst.go.jp/pr/info/info746/index.html> に示されている。

以下に、本取り組みの概略を述べる。

#### 1. CST養成の全体像

図に、CST養成の概略図を示す。現職教員からCSTを輩出する仕組みと、大学の教員養成の段階からCSTを養成する仕組みを整えていることが特徴で、大学の養成段階では、岡山大学教育学部のみならず、理工系学部も含めた全学の中から、教員志望の資質の高い学生を選抜し、大学院修士課程までの6年間を通じた特別プログラムでCSTを養成する。通常、岡山大学の理学部（理学部、工学部、環境理工学部、農学部）の課程のみでは、小学校教員免許を取得することができないが、このプログラムを修了した学生には、小学校教員への道が開けることになる。

現在、特別プログラムを試行して整えており、23年度後期から本実施に移る計画である。現職CSTコースでは、理科授業力向上の意欲の高い教員が参加しやすい仕組みを整え、20歳代から30歳代の若手教員の中から中級CSTを輩出できるようにする。また、輩出したCSTが連携して活動し、学び合いが継続できるようにCSTのネットワークを整える。さらに、中級CSTに助言したり、CSTネットワークを束ねる役割が期待される上級CSTを、力量の高い中堅教員の中から輩出することで、このネットワークが自律的に活性化できるようにする。CSTネットワークを通じて、協力して、理科で困っている教員の支援を進めることで、地域の理科教育の振興を目指している。現在、教員の年齢構成は、中堅の年齢層が非常に少ない状況にあり、

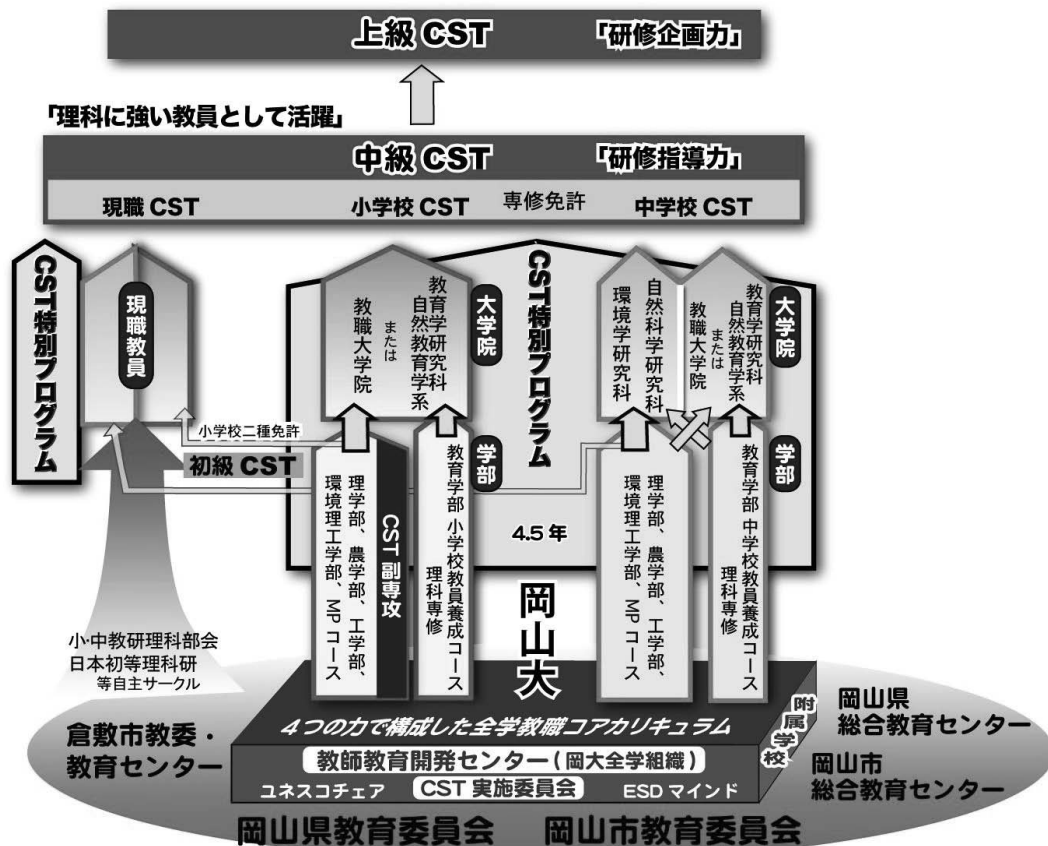
かつて盛んだった理科の勉強会も継続が厳しい状態になりつつある。これらの勉強会を再び盛り上げるためにも、このCSTネットワークを活用していきたい。

CST養成プログラムでは、現職教員と学生や大学院生が議論し学び合える場も多く設ける予定であり、異なる年齢層の交流を進めて、岡山県の理科教育のネットワークを強める仕掛けのひとつとしたい。

## 2 これからの計画

本取り組みは、平成22年度9月から始まり、現在、プログラムの開発や各種制度を整えている段階である。試行実施に協力するパイロットCST生を大学三年生から募り、プログラムの問題点の抽出を進めている。同時に、現職教員が、日常の学校業務をこなしながら理科授業力を向上できる現職CSTコースの実施形態も試行中である。

23年度の後期から、現職CST（中級CST）コースを開始する予定であり、意欲のある若手現職教員の参加を募りたい。日々の理科授業力の向上につながる講座の他、科学の面白さや素晴らしさを実感できる講座も設けることで、刺激のある魅力的なプログラムにする予定である。まだ、詳しい情報は提示できていないが、できるだけ早い時期に、本取り組みのWebページ <http://cted.ed.okayama-u.ac.jp/cst/index.html> でも、講座の詳細を紹介する予定である。理科教育の振興について、良い提案等をお寄せいただけると幸いです。



CST 養成の全体像。大学での養成課程は原則として大学院までを設定。現職 CST コースは学校業務をこなしながら受講できる形態を計画し、理科授業の改善のヒントが得られるプログラムも準備予定。

## 2 岡山大学教員と岡山県・岡山市教育委員会等との連携の取組(参考資料)

所 管			事 業 名 等	岡 山 大 学 教 員 名	備 考
岡 山 県 教 育 委 員 会	岡 山 市 教 育 委 員 会	その他			
	○		操南中学校区子どもの健康づくり連絡協議会	足 立 稔	岡山市立操南中学校区内学校園
		○	山陽西小学校区生活リズム連絡協議会		赤磐市立山陽西小学校区内学校園
	○		はぐくむ心・あったかハート推進事業	安藤美華代	藤田・灘崎・光南台・東山中学校及びその中学校区内の小学校
		○	生徒の表現力を育てるための実践的研究		高梁市立高梁北中学校
○			青少年のいじめ・抑うつを予防する“サクセスフル・セルフ”：実践から学ぶ心理的アプローチ		岡山県立岡山西支援学校学区内学校園 岡山県内特別支援学校
		○	総社市ブロック養護部会『前向きな心で困難を解決しようとする子どもの育成～「健康相談活動」と「心の健康教育」の実践を通して～』6小学校の養護教諭による『心の健康教育“サクセスフルセルフ”への取り組み』		総社市立維新・神在・新本・昭和・秦小学校の養護教諭対象
○			中・高等学校美術研修講座	泉 谷 淑 夫	
		○	学校図書館司書等研修会講演		倉敷市教育委員会
		○	高教研美術部会研修会		高教研美術部会
○			岡山県平成 22 年度学習到達度確認テスト(算数・数学)の監修	岡 崎 正 和	
○			学習到達度確認テスト(算数・数学)作成会議		
		○	藤田地区 ESD 学校連絡会・研修会	川 田 力	



所 管			事 業 名 等	岡 山 大 学 教 員 名	備 考
岡 山 県 教 育 委 員 会	岡 山 市 教 育 委 員 会	その他			
		○	岡山市立第一藤田小学校食べ物マップづくり	川田 力	岡山市立第一藤田小学校
		○	岡山市立第一藤田小学校校内研修会		岡山市立第一藤田小学校
		○	岡山市立第二藤田小学校・総合的な学習の時間の支援		岡山市立第二藤田小学校
		○	藤田地区ESD フィールドワーク		
		○	県立興陽高校ESD フィールドワーク講習会		岡山県立興陽高等学校
		○	岡山県高等学校教育研究会地理歴史・公民部会（地理分科会）		岡山県高等学校教育研究会
○			学力向上実践校事業	黒崎東洋郎	
		○	学力向上実践校事業		浅口市教育委員会 津山市教育委員会
		○	人間力育成事業（if ぶらん）		倉敷市教育委員会
		○	学力向上事業支援		倉敷市教育委員会
		○	学力向上検証事業		津山市教育委員会
○			「教師への道インターンシップ」, 「学校教員インターンシップ」, 「学校教育実践研究 A (PJ 科目)」		
○			岡山県高等学校教科指導パワーアップ事業（数学）	曾布川拓也	
		○	公開授業及び授業研究会において、「社会が求める学力, 学校で育つ学力, 保護者が求める学力」について講演	高旗浩志	岡山県立備前緑陽高等学校
		○	職員研修会において、「学習集団づくり」について講演		岡山市立操南中学校
	○		平成 22 年度「いきいき学校園づくり」公開授業・研究協議会		岡山市立西小学校
○			平成 22 年度指導教諭連絡協議会（高等学校）にて指導・助言		

所 管			事 業 名 等	岡 山 大 学 教 員 名	備 考
岡 山 県 教 育 委 員 会	岡 山 市 教 育 委 員 会	そ の 他			
	○		平成 22 年度「いきいき学校園 づくり」事業における指導・助 言	高 旗 浩 志	岡山市立御南中学校 校区
		○	平成 22 年度「確かな学力の育 成に係る実践的調査研究」		岡山県立林野高等 学校
		○	校内研修会において、「協同学 習に基づく授業づくり」につい て講演		赤磐市立磐梨中学 校
○			平成 21・22 年度研究指定学力 向上実践校ポスターセッション フォーラム 「対談：学力向上に向けた授業 づくり・学校づくり」		対談者：大阪教育 大学 木原俊行氏
		○	「学習集団形成度調査」分析結 果報告，校内授業研究会講演		岡山県立邑久高等 学校
		○	研究授業・研修会において 「支持的風土で授業を変える」 について講演		岡山県立勝山高等 学校
○			生徒指導・教育相談研修講座 (発展コース)において、「発 達課題に応じた支援－社会性 の発達の視点から－」について 講演		林 創
		○	道德教育部会研修会において， 「幼児期の道徳判断と社会性 に関する発達心理学」について 講演	岡山県国公立幼稚 園教育研究会	
	○		平成 22 年度「いきいき学校園 づくり」事業における指導・助 言	藤 井 浩 樹	岡山市立岡輝中学 校区

\* 岡山大学で個人単位での連携について調査した結果，報告が上がったものを一覧にした。

上記一覧以外にも様々な連携が行われている。



V

連携協力の成果・課題・展望

1 連携協力の成果・課題・今後の展望



## V 連携協力の成果・課題・展望

### 1 連携協力の成果・課題・今後の展望

---

#### 1 連携協力の成果

岡山県教育委員会と岡山大学教育学部が、平成12年に「連携協力に関する覚書」を交わして以来、岡山大学の機構改革や岡山県の教育事情の変化にともない、連携協力の事業や組織も様々に変化してきた。さらに、岡山市が政令市に移行した平成21年からは、岡山市教育委員会と岡山大学とが「連携協力に関する協定書」を交わし、以後三者の連携は年々密になってきている。

ここ数年の岡山大学の教育の変化は、平成20年度の岡山大学における教職大学院の発足、平成21年度入学生から適用された、岡山大学教育学部の構造改革にともなう学部最終学年での「教職実践演習」の設置等々、著しいものがある。

国全体においても、免許更新制の問題、学校における教育課題の複雑化・多様化、教員の多忙化に加えて教員の大量退職時代の到来など、教育を取り巻く変化は大きいものがある。教員養成・採用・現職研修などの各段階における改革を総合的にすすめることを提言している平成18年中教審答申によるまでもなく、これからの教員の資質向上を図るためには、学校現場・大学・行政の三者が協働して次世代の教員を育てることが不可欠である。

そういった中で、岡山大学教育学部・大学院教育研究科と岡山県教育委員会・岡山市教育委員会の連携協力研究は着実に成果をあげてきているが、さらに一層連携を深めていく必要がある。今年度の連携の主なものとしては次のことが挙げられる。

#### (1) 岡山県教育委員会と岡山大学の連携

平成20年度以来、岡山大学大学院教育学研究科に設置された教職大学院の「教職実践専攻」に、県教育委員会から現職教員を派遣し、ミドルリーダーの育成を実践しており、今年度も継続している。また、県教育委員会から実務家教員が交流人事として派遣され、教職大学院において、ストレートマスターも含めた教職実践専攻の院生への指導の一翼を担いながら、現職そして将来の教員の資質向上に寄与している。

そして、岡山県総合教育センターによる協力・支援として、教職大学院の新卒院生及び大学教員の総合教育センター主催の生徒指導や教育相談等の実践的な研修講座への参加も可能になっている。

#### (2) 岡山市教育委員会と岡山大学の連携

子どもの学びを中学校区で考えようとする岡山型一貫教育の一環である「いきいき学校園づくり」事業に、大学教員が指導助言に加わるようになって2年目になるが、自校園の保育・授業の改善に向けて、これまでにない視点ができたという現場の評価が多く見られた。岡山市教育委員会で調査した事後アンケートの「保育・授業公開当日の全体会や分科会での大学講師の指導助言は、今後の研究に向け参考になった。」という項目では、「1 そう思う 2 まあまあそう思う」を合わせた評価が、平成21年度調査 75.0%から平成22年度調査 85.8%になり、10.8%上がっている。指導助言に対する学校園現場の満足度

が上がることは、教育の中身の変化に反映されやすいので、今後も大学教員が現場に出かけての指導助言が大いに期待される場所である。

また、昨年度の課題であった「中学校区を俯瞰した組織マネジメントやカリキュラムマネジメントの視点での指導助言」という観点でも、大学教員から適切な助言をいただいたという評価が増えている。

全国的には、学校現場・行政・大学の連携は難しい実態もあると言われている中で、岡山では、これらの連携をかくも容易に可能にしている。それは、これまで岡山県・岡山市の教育の充実・発展に向け、三者が教員養成・教員研修等に関して長年に渡って継続的に連携協力を行ってきた成果であると言えよう。

## 2 連携協力の課題

連携協力は長年継続されてきているが、ここ数年の教育を取り巻く情勢の変化の中で、様々な課題も見えてきた。

県・市・大学から見た課題は次のようなものが挙げられている。

- (1) 免許更新制の導入による、連携の顔とも言える「教員研修の共同開催」（夏期研修講座）の休止、そして10年目経験者研修の協力のスクラップ。今後、制度の変更があった場合、これらの事業をどう扱うのか。
- (2) 岡山県総合教育センターの移転による、「県総合教育センターでの研修講座及び発表会の学生・大学教員への公開」の参加人数の減少傾向。教員養成の観点から、有意義な取組であり、参加希望の学生が容易に参加できるようにするにはどうすればよいか。
- (3) 岡山県「教師への道」インターンシップ事業を立ち上げて3年目。岡山市教育委員会生涯学習課主管の学校支援ボランティアや、岡山大学教育学部でこれまで実施してきた「学生による学力向上」、「学校教員インターンシップ」等、複数のインターンシップ、ボランティアについての整理を行ったが、「教師への道」インターンシップ事業の周知がまだ不十分であり、今後、各種事業を整理した上で十分な周知を図る必要がある。
- (4) 岡山市の「いきいき学校園づくり」については、大学教員に適切な指導助言を得て保育・授業の改善やマネジメントに大いに参考になったという評価が多く見られる。  
しかし、指導主事と大学教員の事前の打ち合わせが十分でないケースもあり、大学教員が指導助言をどのように考えればよいかとまどった面もあった。  
今後は、対象事業の充実に向けて大学教員の参画がさらに効果的に働くよう、事業の基盤整備や見直しを継続的に行っていく必要がある。
- (5) 岡山市教育委員会生涯学習課と連携を図っている学校支援ボランティア制度は、教師を目指す学生にとって教師の日常生活を体験するよい機会になっている。今年度からフィールドチャレンジAとして1年次生より単位認定もできるようになりその幅が広がっている。また、今年から岡山大学に「スクールボランティアビューロー」が創設さ

れ、受け入れ窓口の整理・一本化が図られ、学生にとって分かりやすいしくみとなっている。

しかし、ボランティアを受け入れている学校が大学周辺に集中しており、大学から離れている学校園については希望を挙げても学生とのマッチングがうまくいかないことも多い。自宅通学生への地元校、近隣校への派遣についてPR活動をさらに行っていく必要があると考えている。

次第に三者の連携の体制が整ってきて、事業の重複を避けたり焦点化することが図られてきた。学校園現場でも、大学と行政が連携しているイメージが定着してきており、大学の教員による指導助言を受けて、教育のあり方の改善等に意欲的になっていることを実感している。

しかし、学生が現実の子どもや学校園現場に学ぶことは、採用後に自信を持って教育にあたるためには非常に大きな力となることは誰もが認めているところであるにもかかわらず、県や市の提供する多くの事業への学生参加者数はまだ十分とは言えない。さらなる周知徹底の必要なこと等、連携の中でその課題も見えてきている。

今年度、連携10年を経過した岡山県教育委員会と、連携2年目に当たる岡山市とが、教育のさらなる充実・発展に向けた協議をするために、岡山大学教育学部・大学院教育研究科と、岡山県と岡山市がそれぞれ岡山大学と連携協力会議専門部会（5月、8月）を開くとともに、三者での連携協力会議を共同開催して（10月）、様々な課題を検討した。この会議で検討された課題を次年度に生かしていきたい。

連携協力専門部会と連携協力会議で話し合われた事業の確認と情報交換等の記録は本冊子15～19ページを参照されたい。

### 3 連携協力の展望

三者で連携する新体制での連携が2年目を迎え、岡山県教育委員会と岡山市教育委員会及び岡山大学教育学部の三者が今後一層互いに協力することが、岡山県・岡山市の教員の資質・能力のさらなる向上の実現に、非常に有益なことであることを実感している。

今年度、岡山大学では「教師教育開発センター」が創設され、教育学部以外の専門学部に所属しながら教職を目指す学生の支援を行うことになった。学部の垣根を越えて教員養成に取り組むことは全国的にも例がないことと自負しているところである。今まで教育学部が培ってきた先進的な教師教育の実践を、他学部の教員志望の学生を育てることに活用するとともに、全学化することで見えてきた様々な検討事項を、岡山県・岡山市等との連携にどう反映させていくかが今後の課題となっていくだろう。

目的を一にし大局的な立場で、教員の資質向上に寄与できる大学・行政・学校園現場の連携協力をどのように実現させていくか、さらに研究をすすめていきたい。



## あ と が き

岡山大学教師教育開発センター

副センター長 山 根 文 男

このたび、平成22年度連携協力事業研究報告書を刊行する運びとなりました。本報告書の作成にご尽力いただきました岡山県・岡山市教育委員会の皆様をはじめ多くの方々に、心から感謝を申し上げます。

昨年度までは、連携事業に関わる岡山大学の窓口を教育学部附属教育実践総合センターが担ってまいりましたが、本年度、全学的な教員養成の質の向上を図ることを目的に発展的に改組され、「岡山大学教師教育開発センター」として生まれ変わりましたが、引き続き本センターの「教職コラボレーション部門」が、連携事業の窓口を担うことになりました。今後ともよろしく願い申し上げます。

このことを機に、岡山県・岡山市教育委員会と岡山大学の3者の「連携・協力」の視点を報告書に、より明確に反映していきたいという思いから、本年度、報告書の内容の構成を若干見直し、『岡山県・岡山市教育委員会との連携協定内容・運営組織等』、『岡山県教育委員会との連携協力事業内容』、『岡山市教育委員会との連携協力事業内容』、『その他の連携事業』、『岡山県・岡山市教育委員会との連携協力における成果と課題、今後の展望等』の五部構成とさせていただきます。

このことにより、「連携協力協定の趣旨・目的」を、改めて再確認していただければ幸いです。

さて、昨今の学校における教育課題の複雑化・多様化の中で、平成18年7月の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方」の中に「大学と学校、教育委員会の共同による次世代教員の育成」が掲げられており、教員養成や現職教員研修の充実・改善に向けて、大学と学校現場・教育行政の一層の連携の必要性が求められております。

このような中、岡山県・岡山市教育委員会をはじめ各市町村教委育委員会、学校園現場の皆様の温かいご理解とご協力の基に、本学と盤石の連携協力体制の基盤が確立いたしておりますことに、改めて心から感謝申し上げますとともに、このことが、教員養成・研修、さらには岡山県下の教育の一層の充実発展に繋がりますことを確信いたしております。

なお、本報告書の内容等につきましてのご感想やご提言がいただければ誠に幸いです。

今後ともどうかよろしくお願い申し上げます。

## 報告書執筆者一覧

加賀 勝 岡山大学大学院教育学研究科長（巻頭言）

### 【岡山大学教育学部・大学院教育学研究科と岡山県教育委員会との連携協力】

江木英二 岡山大学教師教育開発センター特任教授（Ⅰ，Ⅴ）  
曾田佳代子 岡山大学教師教育開発センター特任教授（Ⅰ，Ⅴ）  
笠原和彦 岡山大学教師教育開発センター准教授（Ⅱ1(1)②）  
佐藤 園 岡山大学教育学研究科教授（Ⅱ1(2)①）  
黒崎東洋郎 岡山大学教育学研究科教授（Ⅱ1(3)④）

定久照美 岡山県総合教育センター指導主事（Ⅱ1(1)①，Ⅱ1(4)①）  
豊田晃敏 岡山県教育庁指導課指導主事（Ⅱ1(1)③，④）  
川西 隆 岡山県総合教育センター指導主事（Ⅱ1(2)②）  
田中耕二 岡山県教育庁生涯学習課社会教育主事（主幹）（Ⅱ1(3)①，②）  
石井美由紀 岡山県教育庁福利課総括主幹（Ⅱ1(3)③）  
山岡格史 岡山県教育庁特別支援教育室指導主事（主幹）（Ⅱ1(3)⑤）  
岡武俊樹 岡山県教育庁生涯学習課社会教育主事（主任）（Ⅱ1(4)②）

### 【岡山大学教育学部・大学院教育学研究科と岡山市教育委員会との連携協力】

松原泰通 教師教育開発センター特任教授（Ⅲ(1)②）  
山根文男 教師教育開発センター特任教授（Ⅲ(1)③）

中吉浩一郎 岡山市教育委員会事務局生涯学習課課長補佐（Ⅲ(1)①）  
平井秀尚 岡山市教育委員会事務局指導課課長補佐（Ⅲ(1)②，③，Ⅲ(2)①，②，③，Ⅲ(3)①）

### 【その他事業における岡山県・岡山市教育委員会等との連携協力】

稲田佳彦 岡山大学大学院教育学研究科教授（Ⅳ1）

山根文男 教師教育開発センター副センター長（あとがき）

### 編集委員

#### <岡山大学>

教師教育開発センター長・教育学研究科長	加賀 勝
教師教育開発センター 副センター長	高橋香代
教師教育開発センター 副センター長	山根文男
教師教育開発センター	江木英二
教師教育開発センター	曾田佳代子
教師教育開発センター	高旗浩志

#### <岡山県教育委員会>

指導課総括副参事	赤松一樹
指導課指導主事	豊田晃敏

#### <岡山市教育委員会>

審議監	小野恭弘
指導課課長補佐	平井秀尚

岡山大学 岡山県教育委員会  
教育学部・大学院教育学研究科 岡山市教育委員会

## 連携協力事業報告書

---

平成23年3月31日発行  
発行者 岡山大学教育学部  
700-8530  
岡山市北区津島中三丁目1番1号  
連携協力事業研究事務局  
岡山大学教師教育開発センター  
086-251-7728  
rdcenter@cc.okayama-u.ac.jp



岡山大学